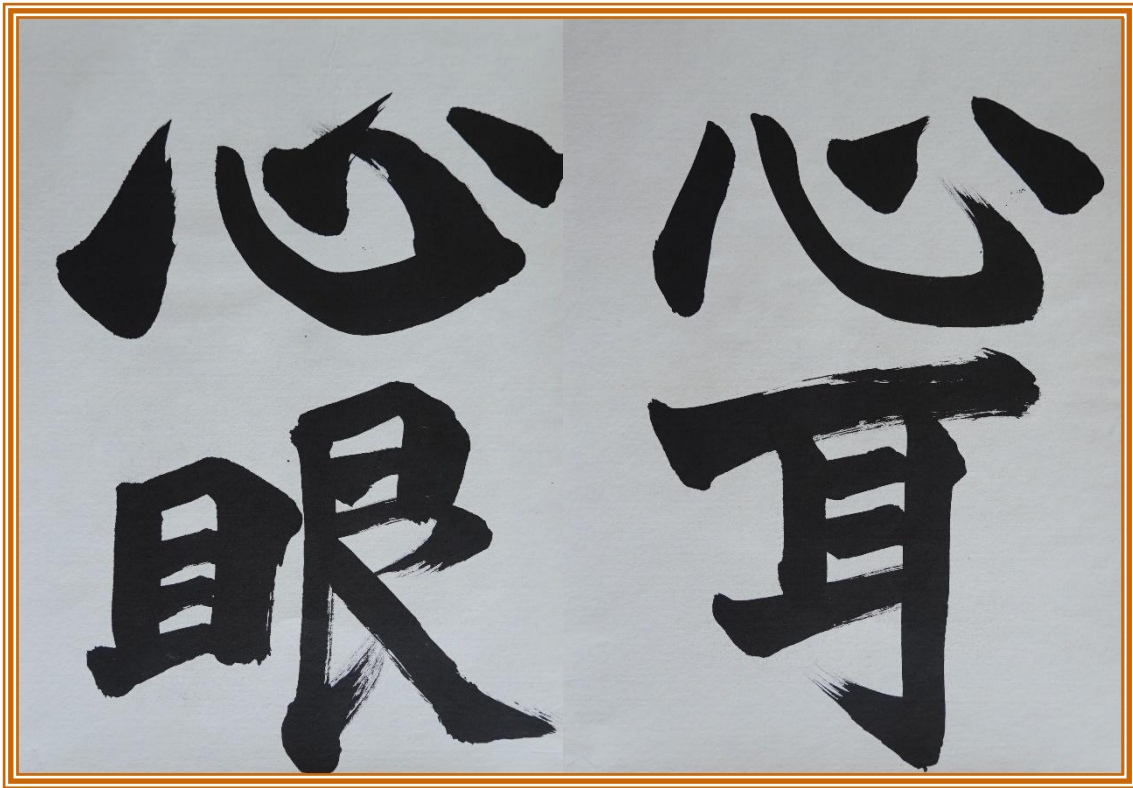


道遠けれど・第52集

道 標

「家庭教育を考える部会 2025 年福岡」を終えて



福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校生徒作品

全 国 ろ う 学 校 P T A 連 合 会

目 次

1	「家庭教育を考える部会 2025 年福岡」開催要項	1
2	大会会長挨拶	2
3	祝辞	3
4	研究協議	5
5	記念講演	9
6	大会実行委員長挨拶	25
7	「家庭教育を考える部会 2026 年盛岡」について	26

実行委員会・奥付

「家庭教育を考える部会 2025 年福岡」開催要項

- 1 名 称 「家庭教育を考える部会 2025 年 福岡」
- 2 趣 旨 社会状況の変化とともに聴覚障がい児（者）を取り巻く環境も大きく変化する中、子どもたちの生きる力を育むために地域や学校と連携した家庭教育の在り方を考える。
- 3 会 期 令和 7 年 10 月 17 日（金） 13:30～17:00 18 日（土） 9:30～11:30
- 4 会 場 福岡リーセントホテル 〒812-0053 福岡県福岡市東区箱崎 2 - 5 2 - 1
- 5 主 催 全国ろう学校 P T A 連合会
- 6 後 援 福岡県教育委員会 九州地区聾学校長会
- 7 主 管 九州地区ろう学校 P T A 連合会
- 8 事 務 局 福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校 P T A
- 9 協力 P T A

福岡県立小倉聴覚特別支援学校 P T A	熊本県立熊本聾学校 P T A
福岡県立福岡聴覚特別支援学校 P T A	大分県立聾学校 P T A
福岡県立久留米聴覚特別支援学校 P T A	宮崎県立都城さくら聴覚支援学校 P T A
福岡県立直方特別支援学校 P T A	宮崎県立延岡しろやま支援学校 P T A
佐賀県立ろう学校 P T A	鹿児島県立鹿児島聾学校 P T A
長崎県立ろう学校 P T A	沖縄県立沖縄ろう学校 P T A
- 10 日 程

【第 1 日 10 月 17 日（金）】

 - 研究協議 I・II 13:30～15:25
 - 協議テーマ I「これまでのかかわりを振り返って」
 - II「これからかかわる中で工夫できそうなこと」
 - 発表・指導助言 15:25～16:10
 - 助 言 者 臨床心理士・公認心理師・手話通訳士 井料 美輝子 氏
 - 開会式・諸連絡 16:20～17:00

【第 2 日 10 月 18 日（土）】

 - 記 念 講 演 9:30～11:00
 - 演 題 「聞こえない子どもたちが幸せに生きられるために」
 - 講 師 金沢大学人間社会研究域学校教育系教授 武居 渡 氏
 - 閉会式・諸連絡 11:10～11:30

大会会長挨拶

全国ろう学校 PTA 連合会

会長 水上 豊

(筑波大学附属聴覚特別支援学校 PTA 会長)

皆さま、本日はご多忙の中「家庭教育を考える部会 2025 年福岡」大会に参加していただき誠にありがとうございます。全国ろう学校 PTA 連合会会長を本年度より務めております水上豊でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

まず、大会開催にあたり主管校である福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校 PTA 会長崎田正一郎様、秋山洋子校長、九州地区ろう学校 PTA 連合会の皆様、多くの関係者のご尽力で本日開催できたことを心より御礼申し上げます。

本日は長崎での全日本聾教育研究会並びに全国聾学校長会に引き続き、全国聾学校長会会長の木村利男校長はじめ多くの校長先生方に参加していただき、また、全日本聾教育研究会会長の西本尚司校長からはビデオメッセージで祝辞を寄せていただき、心より御礼申し上げます。

さて、本大会のテーマは「聞こえない、聞こえにくい子どもたちを心豊かに育てるかわり」です。子どもたちは日々成長し、学校生活や社会とのかかわりの中で多くの学びを得ています。しかし、聞こえない、あるいは聞こえにくいという特性を持つ子どもたちが、安心して力を伸ばす為には、家庭の支えが欠かせません。保護者としてのかわり方は一人一人異なりますが、こうして全国の仲間と学び合うことで、そのかわりをより豊かに広げていくことができると確信しております。

明日の記念講演では、武居渡先生をお迎えし「聞こえない子どもたちが幸せに生きられるために」というテーマでご講演いただきます。先生のお話からは、子どもたちが自分を大切に社会の中で自らがどのように関わるべきか、多くの示唆をいただけることでしょう。保護者としての悩みや迷いに寄り添い前を向く勇気を与えてくださる貴重な時間になると期待しております。

今年は11月に東京でデフリンピックが開催されます。世界中のデフアスリートが集い、競い合い、その力を存分に発揮する姿は、聞こえない、聞こえにくい子どもたちにとって大きな夢と希望を与えてくれるに違いありません。国や文化を超えて努力する選手たちの姿を通して、子どもたちは「自分の未来にも可能性がある」と感じ、前向きに歩む勇気を得ることでしょう。その希望を私たち大人がしっかりと受け止め、日々の家庭教育や学校との連携に生かしていくことが大切だと考えております。

本大会は、地域を越えてつながる保護者が互いに交流し、新たな気づきを得ることのできる大切な機会です。どうか2日間を通じて日常の中で抱えている課題や思いを共有し、子どもたちの未来へと繋がる学びを深めていただければ幸いです。

結びにあたり、ここまで大会準備にご尽力くださった先生方、保護者の皆様に改めて心からの感謝を申し上げます。本大会が参加されたすべての方にとって実り多いものとなり、そして何より子どもたちが幸せに生きられる未来へとつながりますことを祈念し、私の挨拶とさせていただきます。

祝 辞

全国聾学校長会

会 長 木村 利男

(東京都立大塚ろう学校校長)

全国ろう学校 PTA 連合会「家庭教育を考える部会 2025 年福岡」が、関係者の皆様のご尽力により盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

本部会は、「社会状況の変化とともに聴覚障がい児（者）を取り巻く環境も大きく変化する中、子どもたちの生きる力を育むために地域や学校と連携した家庭教育の在り方を考える」ことを趣旨として、長年にわたり開催されてきました。

今回の福岡大会では、研究協議会において「聞こえない・聞こえにくい子どもたちを心豊かに育てるかかわり」をテーマに、活発な意見交換と情報共有がなされることを大いに期待しています。

近年、聴覚障がいのある子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しています。補聴器や人工内耳の発達、ICT の進展、そしてインクルーシブ教育の広がりにより、学ぶ場やコミュニケーションの方法は、これまで以上に多様になってきました。

こうした中、各聾学校では「子どもの個別ニーズに応じた学びの保障」を使命とし、日々取組んでいます。聴覚を最大限に活用するとともに、手話や文字、ICT など多様な手段を組み合わせることで子どものコミュニケーション力を育み、仲間とのかかわりを通して自己表現を促し、社会で自立して生きる力を育てることが、私たちの役割であると考えています。

そのためには、学校と家庭がしっかりと手を取り合い、子どもの成長を共に見守り、支えていくことが欠かせません。忙しい日々の中でも、ご家庭で「今日あったこと」を数分でも語り合い、子どもが「できた！」と感じた瞬間を共に喜び、失敗した時に「大丈夫、次、頑張ろうね」と背中を押す。こうした何気ないやり取りが、子どもの安心感を育み、新たな挑戦への力となります。

言葉にしがれない思いも、親が受け止めてくれることで、子どもは「自分は愛されている」「自分には居場所がある」と確信し、前へと進む勇気をもつのです。

全国の聾学校は、子どもたちが「自分の思いを伝えられる」「仲間とつながれる」「社会で自分らしく生きられる」よう、これからも全力を尽くしてまいります。

現在、全聾長会員校 89 校は、全国ろう学校 PTA 連合会の皆様の活動に支えられながら、互いに連携し、事業を進めています。今後もその協力関係を一層大切にし、幼児・児童・生徒の夢や希望を実現できる聾学校を、「校長会と PTA 連合会」が一体となって創り上げてまいりたいと存じます。

結びに、日々子どもたちの成長を支えてくださっている保護者の皆様に、心より感謝申し上げ、本大会にご参集の皆様の益々のご活躍を祈念し、祝辞といたします。

祝 辞

全日本聾教育研究会

会 長 西本 尚司

(広島県立呉南特別支援学校長)

全国ろう学校 PTA 連合会におかれましては、日頃より各校での PTA 活動をはじめ、地区や全国レベルでの研修会開催などを通して、聾学校の子どもの成長と教育活動を支えていただき、心より感謝申し上げます。

「家庭教育を考える部会 2025 年福岡」開催に当たり、全日本聾教育研究会を代表しまして、お祝いの言葉を申し上げます。

近年、子ども達を取り巻く社会状況は、少子化・高齢化、グローバル情勢の混迷、生成 AI 等デジタル技術の発展など、先行きに対する不確実性がこれまでになく高まっていると言われています。これからの社会を担う子ども達は、激しい変化が止まることのない時代を生きることになると言われています。聴覚障がい教育を取り巻く状況も、医療・保健体制の整備と科学技術の進歩や社会情勢を背景に大きく変化しています。こうした状況を踏まえ、子ども達が学校を卒業した後、様々な人と協力しながら自らの人生を豊かにしたり、新しい社会を切り開いたりするための力を育んでいくことが求められています。

本大会においては、子ども達が生きる力を育むことを目指し、「聞こえない・聞こえにくい子どもたちを心豊かに育てるかかわり」「聞こえない子どもたちが幸せに生きられるために」を視点に研究協議や記念講演が行われます。こうした大会の趣旨は、これからの社会状況の変化を踏まえ、家庭と地域や学校とが連携して家庭教育を進める上でとても大事なテーマであると考えます。

御参会の皆様が、それぞれの立場や学校、地域の実情を踏まえた取組や考えを出し合い、これからの家庭の更なる充実に資する大会となりますことを期待申し上げます。

全日本聾教育研究会におきましても、家庭教育を考える部会とともに、子ども達の生きる力として必要な資質・能力の育成に向け、授業実践を中心に、聴覚障がい教育の向上・発展を目指した研究に努めてまいります。

結びとなりますが、本大会事務局の福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校 PTA をはじめ、主管である九州地区ろう学校 PTA 連合会の関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、参加者の御健勝と聾学校に通う子ども達の健やかな成長を祈念して祝辞と致します。

10月17日(金) I:13:30~14:30 II:14:45~15:25

研究協議



協議テーマ

I 「これまでのかかわりを振り返って」

II 「これからかかわる中で工夫できそうなこと」

研究協議のきっかけとして

今日は「私たち」について考えます

エリクソンでひもとく
発達課題と
私たちのかかわり

最近話題のワードから
・ディナーテーブル症候群
・デフフッド

研究討議 I にあたって

お子さまの「心豊かな育ち」について

- ・あなたが大切にしてきたこと
- ・あなたが工夫したこと などを分かち合しましょう。
- ・うまくいかなかったこと

を話していただいてもかまいません。

合言葉は・・・

みんな がんばってきたね。みんな がんばってるね。❤️

最近
話題の
ワード

ディナーテーブル症候群

- 聞こえる家族の中に1人だけ聞こえない人がいる状況で、
家族の会話に入らず、疎外感を感じたり情報不足になったりすること。
- アメリカのろう者デビット・ミーク氏の研究(2020年)
- 聞こえない子どもたちが体験していること

- ①家族の会話から取り残される
- ②自然に入ってくる情報(偶発的学習)の不足
- ③家族のつながりを感じにくくなる
- ④会話から取り残されていると気づかないこともある

最近
話題の
ワード

デフフッド ←デフネス(聴覚障害)

- 「ろう者であること」を探索する課程
- イギリスのろう者バディ・ラット氏が提唱(1988年)
- 聞こえに関するディスコース(目に見えない抑圧)を意識する
 - ・音声中心の社会構造
 - ・「手話より音声言語が優れている」という価値観
 - ・「聞こえない人は人一倍がんばらないといけない」という価値観・・・
- 聞こえない人、聞こえる人、そして自分と対話し、
どのように生きるのかを探索する「自分探し」の課程

10月17日(金) 15:25~16:10

発表・指導助言

臨床心理士 公認心理師 手話通訳士 井料 美輝子 氏

発表

* Aグループ

「これまでのかかわりを振り返って」、発達の関係や聴力の度合いによってかかわり方が難しいと感じることと、言葉の意味や概念を伝えることが難しいと思うことが話し合いで分かりました。音声や手話それぞれをメインで会話のやり取りをすることで難しさを感じることがあったため、やはり親もコミュニケーション方法として手話を覚える必要があるという話がありました。聾学校それぞれで違いますけど、手話を使う先生がいない学校もあるので、口話ができない子・できる子それぞれと思うので、やはり手話を覚えたり口語を覚えたりとかができるといいなという話が出ました。

「工夫できそうなこと」は、子どもの選択肢を広げる。コミュニケーション方法を自分で決められるように手話と音声両方を大切に、成功や失敗も経験を通して好きなことを見つける、将来につなげることが大事だと思っています。

* Bグループ

「これまでのかかわりを振り返って」だと少し話しづらさを感じたので、「なぜ聾学校を選んだのか」について話し合いました。幼稚部と保育園を併用されたお子さんは、本人が手話とか絵を使って保育園の先生に伝わった成功体験から学ぶことができたという話を聞きました。乳幼児相談から聾学校の幼稚部を決めて、そのまま小学部という



話もありました。また、子どもの性格が一人一人違うことも考えて決めたとか、きょうだい児も聞こえないので聾学校に決めたいけど（聾学校は）子どもの数が少ないことが課題でこれからどうしよう、という意見も出ました。あと発達障がいもある場合、手話・日本語の獲得に力を入れたとか、聾者とかかわりを増やしていろいろな体験をさせているという話もありました。いろいろな地域の方とお話したので、居住地によって学校等に支援の差があることも話しました。

「これから関わるなかで工夫できそうなこと」については、本当にお母さんたちは頑張ってきたねと話して、お父さんも頑張ってくれてはいますけど、やはりお母さんメインで、どうしたらお父さんに手話を覚えてもらえるかなども話しましたが、答えは出なかったのでぜひ井料先生にアドバイスもらえたらと思います。あと工夫できそうなことは、両親が聞こえていて子どもだけ聞こえない状況だと、どうしても両親間の会話は言葉だけ・口話だけになるので、そこをお母さんが少し意識して、常に手話を使えるようにしたいと話しましたが、無理はしないようにということになりました。



* Cグループ

家庭の中でも手話は大事という話がありました。中でも家庭学習の方法に困っていて、子どもたちの手話を確認できる方法が親にはなく、それに対する工夫として、教科書に QR コードをつけて手話の翻訳というか、手話読みをつけてもらえれば家庭学習ができるし、手話の統一にもなるので子どもも先生もきちんと手話を身につけることができるのではないかという話になりました。また、特に新規採用の先生方は、授業時の手話がまだ身についていませんが、先生方も努力して少しずつ手話を覚えてくださっていますが、覚えるまでにすごく戸惑いがあると思います。また、先生方は異動がありますので、1 番迷惑を被っているのは子どもたちですね。今の聾学校の先生方は努力されていると思います。ですが、やはり聾学校で子どもを教える場合、しっかり手話を身につけた上で学校に異動していただいて、手話で教育してほしい。やっぱり手話が言語で、手話言語条例も制定されましたので、聾の子どもたちが手話でコミュニケーションをとれる、手話で教われる、学べるという環境を作る。だから、PTA の皆さんの力を合わせて、しっかりと手話を身につけた先生方を異動・配置してほしいという声を届けてほしいです。そのように社会を変えていけたらと思っています。よろしくお願いします。

* Dグループ

関わってきた反省点が多かったですけど、家族のなかでも手話を使えたり使えなかったりする家族がいる中で、やはりディナーテーブル症候群はあったような気がします。怒る時など声の大きさを考えずに失敗したり、先回りしてしまって失敗する経験をしないまま成長させてしまったり、公園で遊ぶ時に仲間はずれにされた経験をした子どもが公園に行きづらくなったり、というお話が出ました。

子どもも大きくなってきた中で、これから関わる工夫としてどういったことができるかということをお話しました。子どもたちの進路について、親も情報収集していきたいということや、資格を取って進路である就職や進学が強みにしていきたいという話が出ました。これまでも手話も使いながら生活してきたのですが、もっと手話を覚えて更に深いコミュニケーションをとってきたいというお話も出ました。幼稚部からずっと聾学校で、送迎の時間にたくさん話を聞いてきたことに対して子どもから直接感謝されることで、その時間がすごく大切な時間だったということが認識でき、お互いに感謝できるような関係性になった保護者もいらっしゃいます。

「これから関わるなかで工夫できそうなこと」だったのですが、もう子どもたちもそれぞれ大きくなっているので、子どもたちの自主性も大事にしながらかわりすぎず、見守ることでその自主性を伸ばしていきたいと感じています。

* Eグループ

「これまでのかわりを振り返って」は、家庭ではできないことは学校や先生など周りの方にたくさん協力していただきました。習い事や地域の交流には、親が積極的に連れて行き外との交流を作っていました。その中で、人と関わっていけるように職場や公園などに連れて行き、今では 1 人で買い物に行けるようになりました。聞こえる療育・聞こえない療育、両方に連れて行き、本人が自分の将来を選択できるようにしました。聾者とのかかわりを作ったことで、聞こえる人との壁ができてしまったという意見もありました。病院では、丁寧な子育てをしてくださいと言われ、目線・身振り・手振りなど、それを添えて子育てをしてきました。きょうだいたちも協力してくれて、きょうだいの友達ともかわりが出来ました。良いことも悪いことも人との交流が経験になるから、任せているというお母さんがいらっしゃいました。社会に出た時のために、子どもそれぞれの性格にあった私たち親ができること、支援をしていきたいと思っています。デフサッカー・卓球・陸上・バレー・剣道・野球・水泳・自転車ほかにはパソコン・音ゲーム・netflix それぞれ楽しんでいるお子さんの姿を見守り信じて任せるということを大切にしています。



* Fグループ

聴覚障がいが分かって不安でいっぱいだったけど、聾学校で聾のお母さんと出会って、手話をしっかり習得することにより前向きになれた。私は聾者だけど、19歳までは聞こえる世界にいたので、子どもが聾学校に通うようになってから自分も必要だと思って手話を習得した。夫婦デフファミリーで育ちました。1人目の子が健聴でしたが、育て方に悩み、寄宿舎に入って言語を学んでもらった。2人目3人目は聾者だったこともあり、家族間では手話を使って会話をしている。Fグループは聾者が5名もおられて、手話を使ってのおうちの中での会話の様子だったり、子どもとのやりとりだったりが見える協議ができてとても良かったです。

「これから関わる中で工夫できること」は、アドバイスはしますが、自分で学んでもらう、困る経験を大切にする。社会に出ても壁は自分で乗り越える必要があると思っている。反抗期についての話をたくさんしました。反抗期の中での工夫として、放置することも大事。その上で、内容によっては向き合う。その中で、いい意見だなと思ったのですが、お風呂の中でじっくり話し合う。沖縄はお風呂に浸かるという習慣がないので、これもいいなと思いました。結論はハグが大事。スキンシップを取る。親子のコミュニケーション大切にすることだということで、まとまりました。

* Gグループ

重複のグループです。「これまでのかわりを振り返って」は、大切にしてきたこととして好きなことをさせる、その子の得意を見つけてあげるという話が出ました。例えば、カレンダーに予定を全部自分で書かせたり、スイミングや体操教室などに通わせたりという話が出ました。親が子の世界を狭めないように、なんでも挑戦させるという話も出ました。見通しを持たせる工夫として、目で分かる方法とか手話だけではなくて絵や写真を使うとか、家庭や学校、放課後等デイサービスで同じツールを使って何度も繰り返し伝えることで、その子の理解を深めていけるのではないかという話が出ました。そして、困っていることはたくさんあって、言葉にして伝えるということが難しいこと、将来親以外とのコミュニケーションに不安があること、時間の感覚が分かりづらいことなどのお話が出ました。

「これから関わる中での工夫できそうなこと」は難しかったので、逆に教えてほしいという意見がありました。重複であるがゆえに、親以外の理解者を増やすとか他者との関わる場所を増やしてほしいなどの意見が出ました。あとは文章やLINEとかで、文字は読めても理解ができない部分があるので、早いうちから文章のやり取りがあったほうが良かったのかなという意見もありました。例えば、お手紙交換などができればよかったなということですね。そういう家庭以外の場所や自分が好きなことができる場所を作ってあげることができればいいという話が出ました。

○ 指導助言



無事全グループから発表していただきました。指導助言の時間になっていますが、もう残り5分くらいしかないということもありますし、実は私の方からアドバイス申し上げることなどありません。皆さんがこの場で同じ立場である保護者皆さん同士で意見を交わし合ったこと、お話しあったことそのものが皆さんに持って帰っていただけるお土産だと思っています。

そこで、ご質問で「お父さんに手話を覚えてもらう方法はどうしたらいいですか」というのがありました。実は今回盛り込めなかった内容です。少しでもエッセンスを上げると、お父さんに「手話覚えてよ」と直接言っても、逆に引かれてしまったり反抗されたりしてしまうことがあると思います。どちらかという、子どもさんとの手話以外でのかわり、例えばスポーツやゲームとかそのようなかわりをしていく中で、次第に「この子もっと話したい」という気持ちを育てていくところから始めるのもおすすめかなと思います。お父さんが手話学びたいと思った時にお父さん対象の手話教室があるといいですね。全国には何カ所か、土曜日や日曜日にお父さん向けの手話教室を開催している聾学校もあります。そういったところの情報をそれぞれ交換し合って、学校の中に土日に働いているお母さんも学べるような手話教室を設けることも一つの案かなと思います。

最後に申し上げたいのは、先ほどのCグループの発表にもあったように、学校とか社会に変わってほしいと訴えたいことってありますよね。このPTAの連合会はそのためにあるのではないかなと思っています。私には実体験があります。平成22年に初めて聾学校のスクールカウンセラーになったという話をしましたが、その時は聾学校のスクールカウンセラーというのは正式な配置ではありませんでした。聾学校そのものが特別な予算をためてくれて、「これだけお金がたまっただけで年に2・3回来てください。」みたいな、すごく不安定な働き方でした。そこで、私のいる福岡県の聾学校の校長先生やPTAの皆さんが県教育委員会に働きかけてくださった。そのおかげで、平成28年に県内の特別支援学校にスクールカウンセラーが正式に配置されることが決まりました。社会は変えられるんです。でも、保護者の方お1人で悩んでいたり困ったりしても、それを先生に訴えたところでなかなか変わらないかもしれないです。でも学校のPTAだったら変えられるかもしれない。さらに、学校単独では変えられなかったら、こうやって全国の仲間と連携することで、変えることができるかもしれないです。諦めないで、これから皆さんが今日のお話の中でこんなことがあったらいいなとか、こういうふうにしたいなと思われたことを、もっともっと皆さんの中で話し合って、要望みたいなものにつなげていただければ、きっと聾学校の世界も変わっていくと思います。そこを諦めないで進んでいてもらいたいなと思います。今日と明日とあるので、今晚きっと交流される方たちもいらっしゃると思います。その時にたくさんお話しして、何か皆さんからの要望活動とかに繋がるといいと思っています。そして、たくさんのお話し合いがどのグループも盛り上がっているのを見て、ちょっと安心したところもあります。ご協力いただき、ありがとうございました。

10月18日(土) 9:30~11:00

記念講演「聞こえない子どもたちが幸せに生きられるために」

金沢大学人間社会研究域学校教育系
教授 武居 渡 氏

武居 渡 氏

筑波大学第2学群人間学類卒業。

同大学院心身障害学研究科を経て、1999年に金沢大学学部講師として着任。

現在は金沢大学人間社会研究域学校教育系の学校教育学類担当教授として、特別支援学校の教員養成に携わる。

自身が聴覚障がい者である両親の子ども(CODA)として、手話と聾者に囲まれた環境下で生育した経験から、日本手話の文法や手話に関わる心理学的研究、聾児の手話獲得プロセスや手話の発達、手話能力評価法の開発などに関する研究に長年取り組む。

日本手話学会や日本特殊教育学会、日本発達心理学会などの副会長や常任委員等も務め、平成29年度版特別支援学校学習指導要領の編纂にも携わる。



金沢大学の武居と申します。よろしくお願いいたします。昨日も活発な意見交換があったとお聞きしましたが、そこでのお話がどのような内容だったかというのを存じ上げずに今日はお話をします。そんなにずれた話にはならないと先ほどもお聞きしましたので、そのように理解していただければと思います。

少し私自身の話から始めたいと思います。私は1999年の10月に金沢大学に赴任しました。その前は筑波大学にいましたが、そこで10年間大学生、大学院生をしていました。その時には、手話の獲得の研究とか手話の研究に10年間関わってきました。聾学校とか聾教育というのはもちろん関心はありましたが、聾学校の現場に頻繁に行くということもあまりないままに金沢大学に赴任しました。そういうこともあって、そんなに大学の仕事があったわけでもないのに、石川県立ろう学校にはよく行かせていただきました。温かく迎え入れてくださって、殆ど毎週のように幼稚部には顔を出して職員室にも入らせていただき、子どもたちの様子もを見せていただきました。そこでお母さん方のお話を聞いたり、先生方のお話を聞いたりしながら非常に勉強させていただき、石川県立ろう学校には頭が上がりません。今日の自分があるのは聾学校のおかげと言っても過言ではないと思っています。

研究として最初に取り組んだことは、沖縄の離島に住んでいて学校に行ったことのない、聾学校にも一般の小学校にも行ったことのない聞こえない高齢の人の使っている「ホームサイン」に関する内容でした。学校に行っていないので日本語も知らないし、聾学校にも行っていないので手話も知らない方です。全く言語入力がない方が、自分で作り出した「ホームサイン」を使って周りの人とコミュニケーションをしているんですが、その方と2か月間同棲(?)をして、朝も昼も夜もずっと一緒にいて、そのおばあちゃんの「ホームサイン」を私自身が身につけて、その「ホームサイン」の構造が手話とどのくらい似ていて、何が違うのかということを研究したのが私の卒業論文です。それがすごく面白くなってしまって、私は聾学校高等部の国語の先生になりたかったのですが、少し寄り道して大学院で勉強してもいいかなと思って大学院に行ったら、もうそこは研究者を養成するところで、聾学校の先生になるという道は断たれて金沢大学に

いるということです。そのあとは手話の獲得研究、両親聾で聞こえない子どもたちがどのようなプロセスで手話を獲得するのかとか、その子たちがどうやって手話の力を使いながら日本語の読み書きの力をつけていくのか、手話の評価をどうやってしていくのかとか、そんな研究を私はしています。

先ほどご紹介にもありましたように、私の両親はともに聞こえません。父は中途失聴で、ストレプトマイシンで聞こえなくなりました。父は聾学校の高等部の教員をしていたこともあって、我が家にはその時に担任していたり授業で関わったりした生徒が家にやってきて、いろんな困りごとを父に相談するということが結構ありました。父は中途失聴で、日本語の読み書きは問題なくできるので、書類を書かなければいけない時には父に相談に来て、一緒に書いている姿を小さい頃はよく見ていました。それから父は大塚ろう学校で手話を学びました。その手話を見て育った私も、大塚ろう学校で70年ぐらい前に使われていた手話を使っていたということになります。だから、今使っている手話とはかなり違う語彙がたくさんありました。でも家の中ではそれでやっていたので、私はそれが一般的に使われている手話だというふうに思っていたのが、それ以外の聾の人と会って「あっ、これって我が家しか通じないんだ」と思った手話単語はいくつもあります。そこで初めて我が家しか通じない手話なんだなということに気付かされたということもありました。

母は、静岡県出身で沼津聾学校の出身で、美容科の一期生です。そういうこともあって母の同級生や後輩たちが伊豆半島で自営で床屋さんをやっていました。小さい頃はよく、伊豆半島で海水浴ができるので、海水浴を兼ねて家族でその床屋さんの家に泊めてもらいに行き、母とその方はもう夜通し手話で話して、私たちは海で遊ぶという経験をしていました。よく聞こえない人たちが1番嫌な時間はいつかと言ったら、お正月とかお盆とかで親戚が集まってお酒が入る場だと。みんな何を話しているか分からなくて1人だけずっとお酒を飲み続けて寂しい思いをするという話をよく聞きますが、我が家はむしろ逆で、親戚が集まると6人聞こえない人が集まりますし、聞こえる人たちもそんなに手話が流暢なわけではないので、むしろそちらの方が孤独を感じるような親戚の集まりでした。だからそういう意味では聾の人に結構うらやましがられたりもします。

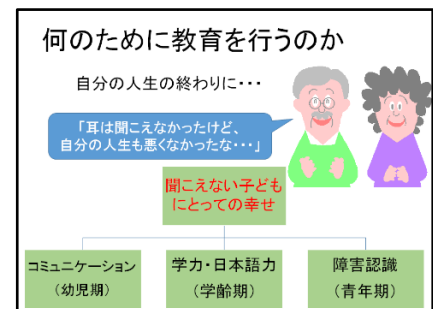
『手話政策推進法』が出されたように、手話はやはり言語なんですね。言語となると、その背景には必ずその言語を使っている人たちの行動様式や文化があるわけです。その中の一つが挨拶です。手話はあまり挨拶をしない文化なんですね。しないと言うと少し語弊がありますけども、「おはようございます。」「こんにちは。」とかいう手話はありますが、この手話は聞こえない人同士が使うことはほとんどないですね。だから聾の人同士で「おはよう。」とやることはほとんどないと思います。では、どうするかって言ったら「おお。」「元気？」とたぶんやと思うんですね。だから我が家には挨拶という文化がほとんどなかったんですね。ところが幼稚園に行くと、40年50年近く前なので、当時は挨拶は非常に重んじられるわけです。お弁当の前に「いただきます。」と言い、食べ終わったら「ごちそうさま。」と言う。それも我が家にはない習慣だったので、すごく違和感がありました。「早く終われ。早く終われ。」と思いながらその時間を過ごしていたんですけども、1カ月2カ月ぐらいすると自分の中でスイッチができるようになってきます。幼稚園ではこうのように振る舞えばいい、家ではこういふようにすればいいというスイッチができるようになると、自分の中でも楽になりました。

このように、私は手話を誰かに教えてもらったという経験はあまりないです。気がついたら日本手話と日本語両方をそれほど問題なくできていたという感じで、親も別に手話を教えたという感じではないと思います。いろんな聾者が我が家にはきていたので、そういうものを見ながら自然に覚えたんじゃないかなと推測します。父は日本語ができたので、聾学校ではなくて地域にいる日本語ができない聾の人や、日本語があまり得意ではないという聾の人もよく我が家に入りしていました。「市役所からこんな書類が来たんだけど、これどういう意味か。」とか「どうやって書いたらいいのか。」と

いうのを父に聞いて、父が「ここはこうだ。」と説明していました。私が小学校から帰ってくると、父も母もいないけれど全然知らない聞こえないおじさんが自分でお茶を淹れて「よ！」みたいなことが我が家にはよくありました。その方々には随分可愛がってもらいました。そういう意味では手話というのは、私にとっては非常に身近で、自然なものでした。

ただ大学に入って手話サークルを少しのぞいた時に、自分の使っている手話と手話サークルで使っている手話が違いうということに、まずカルチャーショックを受けました。手話を誰かに教えてもらっていたわけではないので、「私の手話は間違っているんだ。」「家でしか通じない手話なんだ。」と思って、大学の時に自分の使っていた手話を全部捨てたんです。そして、手話サークルでやっている手話が正しい手話だと思って学んだんですね。それで、半年ぶりぐらいに実家に帰って父や母と話した時にすごく違和感があったんですね。外国語で話しているような感じでした。それで、自分にとっての手話とは一体何だろうということを突きつけられて、もう1度手話を拾い直すことをしました。

私たちは何のために教育をしているのかと考えた時に、やはり目の前に子どもがいる時はもっと学力や日本語力、言葉の力をつけないといけないと思うでしょうし、もう少し学年が上になったら高校受験とか大学受験に耐えられる学力をつけなきゃとか、このままだと就職するのが心配だ、社会性を身につけなきゃなどといったいろんなことを心配されるんだと思います。ただ少し引いて、もう少し長いスパンで考えた時に私たち聾学校の教員や大学などの立場では、



何のために聞こえない子どもたちに教育をするのか、日本語力なのか、社会性なのか、と考えた時に私はこのように思うんですね。聞こえない子どもたちというのは、必ず聞こえない大人になります。聞こえる大人にはなりません。そして、聞こえないおじいちゃん聞こえないおばあちゃんになって、おそらく今から80年後ぐらいに自分の人生の幕を閉じることになります。その80年後に彼らが自分の人生の幕を閉じる時には、もう我々はこの世にはいないかもしれない。でもその時に、「自分の耳は聞こえなかったけれど自分の人生悪くなかったな。」と思って自分の人生の幕を閉じられる。そういう人生を送れるように、私たちは今教育をするんだと思うんですね。だから、どんなに言語力が高くて、発音が明瞭でも、学力が高くて、それがその子の幸せにつながらなかつたら何のための学力、何のための言語力なのだということになるわけです。そしたら聞こえない子どもの幸せとは一体何という話になるんですね。実は聞こえない子どもたちの幸せに関する研究というのがあるんです。これはある難聴学級の卒業生の集まりというか会があって、そこは伝統のある難聴学級なので100人以上の卒業生がいる固定制の難聴学級なのですが、その人たちにいろんなアンケート調査をするんですね。今自分の人生幸せだと思っているとか、学歴とか結婚しているとか子どもがいるとか収入はどのくらいとか。無記名ですけども、ありとあらゆる質問をします。そして、因子分析という手法を使うことで、例えば幸せだと思う人にはこういう傾向がある、あまり幸せじゃないと思う人にはこういう傾向がある、言い換えれば幸せを規定する要因にはどういうものがあるのかを統計的に浮き彫りにするという手法があるので、それにかけて聞こえない子どもたちの幸せの因子を調べたという研究があるんですね。その結果、聞こえない子どもたちの幸せというのは大きく三つの因子が見出されたんですね。

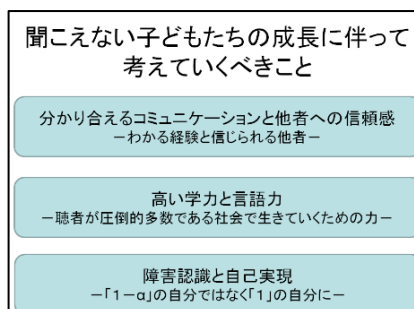
一つ目の因子は、友達の多さです。聞こえる、聞こえないにかかわらず、友達が多いと答えている人は自分の人生を幸せだと思う人が多い。友達が少ないと答えている人は自分の人生あまり幸せじゃないと思う人が多い。友達の多さというのは、少し教育に引きつけて考えたら、コミュニケーションなんだろうと思うんですね。人とやりとりをする。だから

聾学校とか聾教育のミッションの一つは、やはりコミュニケーションなんですね。それは聞こえる人、聞こえない人両方です。日本語か手話かどちらかに限定することなく、人とやり取りができるということが一つ目の柱になると思います。

二つ目の因子は、学歴です。つまり、高卒よりは大卒、大卒よりは大学院卒の人の方が自分の人生を幸せだと思う人が多い。やはり、これまで聾教育で言われている学力とか言語力というのはとても大切なんで、大きな柱になっていくだろうと思います。ただし、誤解のないように付け加えると、学力や言語力さえあれば幸せになれるという意味ではありません。学力や言語力が高くても、残り二つが低ければ自分の人生はなんだったんだろうということになるし、学力や言語力がそこまで高くなくても友達がたくさんいて、次の三つ目の要因がすごく高得点だったら自分の人生幸せだと思うので、学力だけで幸せかどうかが決まるわけではないんですけれど、少なくとも学力というのは非常に大きな柱だということです。だから、聾学校はやはり学力や言語力を高めるというミッションは、やはり手放しては駄目だと思います。これは保護者の方というよりは、聾学校の先生に向けたメッセージになると思います。

三つ目の因子は、職場の快適さです。今働いている仕事が快適だ、職場環境が快適だと思っている人は自分の人生を幸せだと思う人が多い。それに対して今働いているところが、常に聞こえる人たちの顔を伺いながら働いているとか、周りを見ながら周りに合わせようとしながら働いていて、本人にとってしんどさを感じている場合には自分の人生をあまり幸せじゃないと感じる。職場の快適さというのを教育に引きつけて考えたらどうということかという、聞こえない子どもたちは聞こえる人たちの中で働くことが圧倒的に多いわけです。周りの聞こえる人たちに、自分が聞こえないということや聞こえにくいということをきちんと伝えることができ、周りの人がそれを理解してくれている環境になれば当然働きやすくなるわけです。でも、自分の聞こえにくさを隠していたり、言わなかったり、あるいは無理をして少し背伸びをして何とか周りに合わせているような環境で仕事をしていたら、やはりどこかで無理が生じて、自分の人生はなんだったんだろうと思ってしまう。だから、このような三つの柱が因子分析の結果で出てくるわけです。

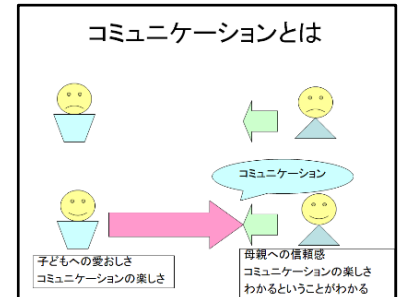
これを聞こえない子どもたちの成長に伴って考えるべきこととして、少し教育に引きつけて考える。言い方を変えれば聾学校のミッションと言ってもいいと思います。今の繰り返しになりますけれども、一つ目はしっかりとコミュニケーションをする、できる経験を幼児期から保障しましょう。これはもう乳幼や幼稚部の先生方などはどの聾学校でも1番大切にしているところだと思います。分かり合えるコミュニケーションというのを幼児期からしっかり保障をして、



そこを通して「人って信頼できるんだ」ということを学ぶ。それがすごく大切だと思います。二つ目は日本語力・学力、特に言語力、日本語力です。「話す」「聞く」は『UD トーク』とか『YYProbe』のように音声を文字にかえるようなアプリが出てきていますし、今後もっと出てくるので、むしろ「読む」力・「書く」力ですね。これらをしっかり身につけることで、聞こえる人たちの中で生きていく力をつけていく。三つ目は、障がい認識あるいは自己理解。最近は「セルフアドボカシー」という言葉をよく使いますが、「セルフアドボカシー」あるいは自己理解と自己実現。自分の聞こえない、聞こえにくいということを自分自身でしっかり理解をして、しかもそれを必要以上に卑下することなく聞こえる人たちと対等にやっていく力が三つ目になります。サブタイトルで「1-a」の自分ではなく「1」の自分にと言いましたが、これは昨日の全日聾の分科会の時にも話をしたんですが、どういう意味かという「a」は聞こえです。自分のことを聞こえる人から聞こえを取り除いたのが自分なんだというふうに捉えてしまうと、常に自分のことを「1-a」、つまり聞こえる人よりも少し劣った自分というふうに捉えてしまう。そうすると、そのaの値をなるべく小さくしよう、だから補聴器をしていることを隠そうとか、周り

の人に合わせようとか、そういうことをして α の値を小さくしようと子どもたちは努力するけれど、 α の値は0にはならないので、常に「聞こえる人からは劣った自分」と捉えてしまう。それはいつかやはりポキンと折れてしまいうだろうと思います。そうではなくて、聞こえる人も「1」、聞こえない自分も「1」。分かるための手段とかコミュニケーションの方法は違うかもしれないけれど、同じ対等な「1」なんだと自分のことを捉えられる。そのような子どもたちに育てていく必要があると思います。

このことについて、少し例を挙げながら話をしていきたいと思います。まず分かり合えるコミュニケーションということですが、これは結構あちこちの聾学校の乳幼稚園部の先生方にも、乳幼稚園部に子どもがいっしょやる保護者の方にも話をしているので、もしかしたら同じ図を見ているかもしれません。それでも使い続けるのは、ここからしか始まらないと思っているからです。2番目3番目の話というのは、この1番目のコミュニケーションがしっかりしていないと、その上にどんなに言語とか言葉とか手話とか社会性とか載せようとしてもやはり崩れてしまう。つまり、コミュニケーションの経験というここからしか始まらないので、その話をあえてここではしたいと思います。向かって右側が子どもで、左側が大人と思ってください。子どもから矢印が出ています。でも矢印が短くて大人まで届いていません。これまで聾教育とか障がい児教育、特別支援教育の中では、あるいは医療の世界では子どもに指導・訓練をしていくことでこの矢印を少しでも伸ばして、この矢印が大人までたどり着いたらコミュニケーションの力がついたと理解する。子どもの矢印が短いというのは、正しい言葉で正確に伝えられないということです。例えば、指さして「あああ。」というふうに言う。矢印が伸びて大人まで届くということは、「あそこに猫がいるよ。」「猫がいたよ。」「猫見たよ。」というように言葉で説明できることと考えたら、日本語でしっかり伝えられるように子どもに指導しようと考えてきたところがあります。ところが、コミュニケーションとは、果たしてそんなものなのだろうかと思うんですね。子どもの矢印が短くても、そこまで大人の矢印を伸ばしてあげたら、矢印と矢印のぶつかる接点ができます。これがコミュニケーションなのではないでしょうか。では、大人の矢印を伸ばすとはどういうことなのかと言ったら、子どもの表情や身振りや声や文脈などを加味しながら「この子はいったい何を伝えたいのかな。」と考えながら子どもの言いたいことを汲み取って、そこに返してあげる。これが大人の矢印を伸ばすということです。つまり、指導することで子どもの矢印を伸ばすのではなくて、周りの大人、先生かもしれないし、お父さんやお母さんかもしれないけれど、大人の矢印を伸ばして、「この子は一体何を伝えたいのかな。」と考えながら、その子の言いたいことを汲み取りそこに応える。そして、乳幼とか幼稚園部の人生の最初の時期に、この矢印と矢印がぶつかるという経験をできるだけたくさん積み上げていくことが、この後の日本語力・学力そして自己理解のベースになっていきます。ここを疎かにしてしまうと、結局は小学校・中学校になってもここから始めないといけなくなるんですね。だから、これがとても大切です。また、自分が何か発信しても、常にそれを否定されたり修正されたりするように大人から関わられると、当然子どもは「話したい。」「伝えたい。」という気持ちは減退していきます。だけど、自分の発信がどんなに未熟なものであっても、分かりにくいものであっても、周りの大人がそれを理解して答えてくれたら、「もっとこの人に伝えたい。」「この人に自分の思いを伝えたい。」という気持ちになっていくのだろうと思います。つまり、大人の矢印を伸ばすことで、分かってくれる大人がそばにいて、その人に対する信頼感が生まれてきます。信頼感が生まれると、もっとその人に「伝えたい。」「分かりたい。」という気持ちが芽生えてきますから、当然コミュニケーションは楽しくなっていきます。そして私が何より重要だと思うのは、この大人の矢印を伸ばして矢印と矢印のぶつかる接点をもつ経験を積んでいくことによって、子どもたちは「分かる。」ということがどう



かが分かるようになるわけです。そして、「分かる。」ということがどういうことがしっかり幼児期に分かると、この後おそらくもう少し大きくなって遭遇するであろう、分からない状況に出会った時に「自分は分からない。分かっていない。」ということが分かるんですね。自分が「分かっていない。」ということが分かれば、分かるための手段を講じることができます。例えば、「もう1回言って。」「手話通訳つけて。」「紙に書いて。」などと分かるための手段を講じることができるんですね。でも自分が「分かっていない。」ということが分からなければ、分かっているところだけをつまみ食いして、ボヤッとした理解でただ時間だけが過ぎてしまう。それが中学校・高校になったら大爆発してしまうんですね。だから、この時期に「分かる」経験をしっかり積み上げていくことはすごく大切で、私はこのことを先ほど少し話をした聾学校の子もたちに教えてもらいました。まだ私が20代の頃、石川の幼稚部にいた子たちですが、石川の規模では珍しくその代は1学年12人という大きな集団でした。いろんな子がいます。その中には重複のダウン症の子や自閉の子もいますし、70dB ぐらいの子もいれば、まだ人工内耳がなかった頃なので110dB スケールアウトでやっぱり手話ではないとなかなか通じないという子までいろいろいる12人でした。その子たちが徐々に手話を使い始めて5歳になった時に、石川では毎週金曜日には地域の保育園に希望者だけでも、居住地交流に出るんですね。先生方はこれまでも普通に交流に出て楽しく遊んで、楽しく帰ってきていたので、あまり深く考えずに、もう5歳になったし金曜日は地域の幼稚園保育園に行って遊んでおいでと言って送り出したわけです。そして、次の週の月曜日にもう1回聾学校に集まった時に交流どうだったという話し合いになるんですね。交流の話し合いの時に子どもたちが口々に「僕はもう交流に行きたくない。」「私も行きたくない。」ということをして5歳の子たちが言ってきたんですね。今までそういうことがなかったの、先生たちは少しびっくりして、「どうして？」と子どもたちに聞いたら、「幼稚園や保育園では周りのお友達や先生は口だけで話をするから僕は／私は何を言っているかさっぱり分からない。だから、先生と一緒に来てくれるんだったら自分は行きたいけれども、先生が来てくれないんだったら、周りで何を言っているのか分からないから自分は行きたくない。」ということをして子どもたちが言ってきたというんですね。私はその瞬間には立ち会えませんでした、その2日後ぐらいにその話を聞いて、第三者的にですが、その子たちは3歳、4歳とずっと見てきていたので、「ああすごく成長したな。」と思ったんです。それはなぜかという、わずか5歳という年齢で幼稚園・保育園に行って、彼らは自分が「分かってない。」ということがきちんと分かっているんですね。自分が「分かっていない。」ということが分かたら、今みたいに「先生一緒に来て。」と言えるんです。もう少し大きくなったら「紙に書いて。」「ロジャーつけて。」とお願いできるんです。でも、分かっているか分かっていないかが分からなかったら、たぶん分かっているところだけをつまみ食いして、「ああ楽しかった、交流。」で終わっていたと思うんですね。そうではなく、なぜその子たちがきちんと自分が分かってないということが分かったかと言ったら、乳幼の時や幼稚部の時に、家庭でも聾学校でも丁寧に分かる経験をきちんと積み上げてきたからなんですね。手話の力もすごく大きいんですけど、「分かる」経験をきちんと積み上げてきたからこそ、自分が分かってないということが分かるようになったと思います。

今、中軽度難聴とか人工内耳で、とても聴覚が上手に活用できる子たちが増えています。でも基本的には同じなんですね。同じなんです、以前よりも大変なのは、分かっているように見えてしまうんです。その子たちはみんな頭いいし周りの様子もしっかり見ているので、行動だけを見ていたら全然問題ないように見えてしまうんですね。だからほっとかれてしまう。だけど、本当にその子が分かっているかどうかをきちんと確認しながら、家庭の中でも、聾学校の中でも「分かる」経験を積み上げなければいけないと思います。例えば、家族でテレビを見ていてみんなが笑った。でも1人だけぼかんとしている。それで、「お母さんなんて笑ったの。」と聞いてきた時に「面白いこと言ったからだよ。」で終わらせ

ずに、「この人がこういうふうに言って、この人がこんなこと言ったからみんなずっこけて笑ったんだよ。」ということ、もちろんタイムラグはあるかもしれないけど、きちんと説明する。家族や周りの人たちがなんでそう思ったのか、そう感じたのかということ、をきちんと説明するということを積み上げて、「分かる」環境を積み上げていくことがすごく大切だということです。もうここで終わってもいいぐらい大切なことで、今日のテイクホームメッセージの8割ぐらいは今の話です。

あとは、コミュニケーションというのは能力ではないということなのですね。「子どもにコミュニケーションの力をつけさせる。」ではないんです。子どもにコミュニケーションの力をつけさせるということは、その子の言いたいことを汲み取る「私の」コミュニケーション力を高めることと同義なのですね。私がこの子の言いたいことをどれだけ取れるのか、汲み取れるのかという。そして、その結果として矢印と矢印がぶつかる接点が整理されるということです。それがこの後の言語、手話にしても日本語にしても基盤になっていくということです。だから、言葉がないとコミュニケーションができないのかと言ったら全然そんなことはありません。0歳児の赤ちゃんは狭い意味での言葉をしゃべるわけではないですが、赤ちゃんとはたくさんコミュニケーションできます。泣いたり笑ったり、指差ししたり、ちょっと顔をしかめたり、そういうものを周りの大人はしっかりと汲み取って、そこに答えてあげるわけです。「あれ、ちょっと泣き方違うぞ。」と思ったら、「身体の調子が悪いのかな。」と思うとか。時間的に「今泣いているのはそろそろお腹空いたのかな。」とか。子どもの言葉ではないけれども、様々なメッセージをそこから汲み取って応えてあげる。それは立派なコミュニケーションの成立なのですね。それから、いわゆる重身と言われている重い障がいの子、寝たきりと言われている重い障がいの子たち。先生方の中にも、その子たちを指導されたことがあるという方がいらっしゃるかと思います。でも、一般的には寝たきりと言われる子であっても、その子を知れば知るほど決して寝たきりじゃないんですね。いろんなメッセージを出してくれるわけです。ちょっと顔をしかめていると「あ、これ嫌なのかな。」とか。ちょっと緊張が緩んだら「あ、この音楽好きなのかな。」とか。そういう子どもの発信をどれだけこちらが受け止められるかというのは、子どものコミュニケーション能力の問題というよりは私とその子の言いたいことをどれだけ汲み取れるかということなので、特に子どもが小さなうちは周りの大人がその子の伝えたいことにしっかりアンテナを張って、汲み取ってあげることが大切になるのです。だから、コミュニケーションというのは教えるものではなくて育てていくものです。特に、この時期の「言葉」で教え込んだものは、とても歪なものになります。

絵カードで教える。以前はよくされていたことですが、絵カードはマッチングなので、その絵を見て言葉を言うとか、言葉を聞いて絵を選ぶというマッチングは、確かにそれでできるようになるかもしれない。でも、その言葉が本当に生きた言葉になるためには、例えば「みかん」だったらみかんを一緒に家で食べるとか、みかんが好きなんだけど家なくて子どもが泣いて「じゃあ今から一緒にスーパー買いに行こうか」と言って買いに行ったら食べられたとか、そういう経験があって初めてその言葉というのは生きたものになるんですね。だから教え込んだものというのは歪になる。むしろ伝えたいような環境、言葉かけというのを周りの大人がどれだけできるか。その中で、子どもは伝えたいという気持ちが生まれてくるんだということです。これが一つ目の話題でした。

二つ目。高い言語力と日本語力、高い学力と言語力ということです。この会は保護者の会ですので、おそらくこの大きなところは聾学校の先生になるので、ここでは重要性だけに触れて、どういうふうに育っていくかとはあまり説明せずに先に行きたいと思います。手話を使ったり使わなかったり、あるいはキューを使ったり、対应手話を使ったり、日本手話を使ったりというように、いろんな指導法がこれまで聾教育の中では言われていましたけれども、実はこのいろんな指導法の最終的なこのゴールというのは、そんなに変わらないと私は思っています。最終的には日本語の読み書きの力をどれだけつけられるかということです。特に日本手話を使っていて、バイリンガルと言われている指導であって

も、手話で何でも理解できて、手話で何でも話ができる。もちろん、それは決してマイナスではありません。それができるといっても、とても大切なことなのですから、そこがゴールではないですね。「できた」「理解できる」、そのことを日本語でどう書けるのかとか。日本語につながることで、「バイ」つまり 2 つの言語になるので、そこにつながってこそ初めて「バイリンガル」の成功になるわけです。そう考えたら、やはり日本語の読み書きの力をどれだけつけるか、ということが聳教育の非常に大きな柱になっていくと思います。なぜかという、私の父や母の時代以上に、これから子どもたちの方が日本語の読み書きの力が必要になってきています。私の父や母の時代は、聞こえない人たちは「情報障がい者」と言われていたんですね。つまり、聞こえないからテレビのニュースで何を言っているかが分からない。車内放送が聞こえないので、今何が起きているかが分からない、バスがどこを走っているかが分からない。しかし今は、ほとんどのテレビ番組に字幕がついています。ドラマを楽しんでいる聞こえない人たちはたくさんいます。私の父や母の見る番組というのは、『全員集合』とかで、音声がなくとも楽しめるんですね。ニュースとかドラマとかは見ないのは、活字媒体の方に頼るということで、新聞で情報を取るという意味です。それから、人とのやりとりもすごく大変でした。例えば母は、伊豆半島に床屋さんの友達がいるのですが、その人のところに夏休み遊びに行きたいと連絡を取る。私が小さい頃は本当に大変でした。どうしてかという、往復はがきに「何月何日に遊びに行きたいんですけど、都合はどうか。」と送ると、4、5 日後に「その日はちょっと用事があって無理だけど、この日だったら大丈夫です。」などと返事が返ってきて、「じゃあ何月何日に遊びに行きますね。」というはがきを出す。たかだか「遊びに行きたい」という話をするのに 10 日近くかかりました。それが劇的に変わったのは、ファックスです。今やファックスも死語ですけども、ファックスが我が家に入ったのはミニファックスと言われていた時代で、すごく遅いファックスでしたが、あれで劇的に変わりました。リアルタイムに「今度遊びに行きたいんですけど。」と送ると、1、2 時間すると「その日は無理です。」と返事が返ってきて、「じゃあ、この日に行きたいです。」と送る。今まで 10 日かかっていたのが、1 日でやりとりができるようになりました。メールとかラインとか携帯だったらもう聞こえる人たちと全く同じだから、やり取りも科学技術の進歩によってすごく改善したと思います。それから、例えば電車が止まって車内放送で説明をするのでも、インターネットでかなり情報を発信してくれるので、聞こえない人たちも何が起きているのかネットで調べて、「この先で事故があったんだな。」「あと 10 分したら動き出すぞ。」などの情報が取れる。それから、文字音声を変換するツール、YYProbe とか UD トークを使うことで、聞こえる人たちと文字を媒介にしてやり取りをするということもできる時代になりました。だから、聞こえない人たちはもはや「情報障がい者」ではありません。でも、これらのほとんどは日本語の読み書きができればという話なのです。日本語の力があれば、字幕放送も楽しめるし、インターネットで情報も取れるし、メールやライン等で聞こえる人と対等にやっていくこともできるし、会議では UD トークなどを使って参加ができる。でも、日本語が苦手という場合にはこれらの文明の利器を十分に活用できないことになってしまう。以前より「情報障がい者」になってしまう可能性があるんですね。日本語の読み書きの力というのは、以前より大切になっていると私は思います。日本語の読み書きができれば、文字を介して様々な情報を手に入れることができるようになります。今までのような本とか新聞だけじゃなく、インターネットとか、字幕とか、オンタイムの情報を手に入れることができる時代になっています。だから日本語力というのがすごく必要なのですが、ただ日本語の力さえあればいいのかというとそうではなくて、その情報が本当に正しいかどうかを考える力というのも今まで以上に求められます。特に、インターネットとか SNS には間違ったこともたくさん載っています。そ

メディア・リテラシー

日本語の読み書きができれば

- 文字を介して情報を手に入れることができる
- 本やインターネットだけでなく、字幕放送などでオンタイムに情報を入手することができる

日本語の読み書きができて

- その情報が本当に正しいものなのか
- 情報をどう解釈し使うか
- 既存の知識とどう融合するか

れらを「この情報は嘘だ。」「こっちの方が信頼できる。」と、情報を選択する力も求められるんですね。聞こえない人たちの中で、新聞を賑わすネズミ講の事件というのがだいたい2、3年に1回ぐらい起きます。聞こえない人同士のネットワークの中で、例えばこの化粧品はすごくいいとかこの薬を飲むとすごく健康になるとか、そのようなものが聞こえない人たちのネットワークの中で流れるんですね。それだけで終われば、「全然良くならなかった。」で終わる話なのですが、これがネズミ講に関わるんですね。つまり、「ひとつ5,000円なのだけれども、知り合いを2人紹介してくれてその2人が買ってくれたらあなたはタダになりますよ。4人紹介してくれたらタダになるだけではなく、5,000円あげますよ」みたいなことでどんどん広げていくわけです。そうすると、知人も自分もいいと思っているものなので、いいと思っている人は仲のいい人にそれを紹介するわけです。ところがネズミ講なので、仲のいい人に損をさせるということにもつながっていくことになります。友達関係とか人間関係がズタズタになるんですね。単にお金がなくなった、お金を損したというだけではなくて、聞こえない人たちの人間関係をも壊していく非常に残酷な犯罪だと思います。だから「ネズミ講だ危ないぞ。」と思える力もまた育てていかないと、巻き込まれてしまう可能性があるということです。

本当はこの後に「日本語をどう育てていくか。」ということをお話しなければいけないんですが、これは恐らく聾学校の先生の仕事になってくるので、最後の障がい認識・自己理解の話に移りたいと思います。これもすごく大切です。

少し昔話ですが、私が学生の時の話をしたいと思います。私は筑波大学で10年間過ごしました。筑波大学は全国的にも聴覚障がいのある学生が比較的多い大学の一つです。すぐお隣に筑波技術大学があって、その一期生と私は同級生なので、一期生の人たちともずいぶん仲良くしてもらいました。筑波大学にも当時十数名の聴覚障がいのある学生がいて、僕が大学院に入った時はこの倍ぐらいの聴覚障がいのある学生が筑波大学に入学していました。当時はほとんどがインテグレーション、聾学校を経験していない、あるいは経験していたとしても幼稚部だけという人たちがほとんどでした。私が大学生の時には聾学校卒は2人だけ。2人とも附属聾学校の卒業です。今は全然そんなことはありません。今は聾学校から筑波大学に入る人たちがたくさんいますが、当時はそのような状況でした。全国からそういう聴覚障がいのある学生が集まって勉強しているんですが、その人たちは地元に戻ったらエリートなのですね。誰もがうらやむ「お宅のお子さんいいわね。大学に入ってそうやって聞こえる人たちの中で勉強できてうらやましい。」とみんなに思われていた人たちです。エリートでもあるし、成功者と言われる人たちかもしれません。でもその同じ友達・仲間として彼らと話をしていると、いろんな課題を抱えている、荷物を背負ってきているんですね。

一つは、聴者にも聾者にもなれなくて悩む聴覚障がいのある学生の話です。まだ大学で手話通訳要請などなく、「情報保障」という言葉もなければ、大学がノートテイクを用意することもなく、学生たちがボランティアで対応していた時代です。聴覚障がいのある学生が1人いました。その学生は、一般の学校で育った人で、言語獲得にはほとんど困らずにきた学生でした。ただし、大学の時には1対1だったら音声でやれるけれども、マイクを使った講義になると全然聞き取れないという状況になっていました。そして聴力もどんどん落ちてきて、大学4年生ぐらいにはもう1対1でもかなり厳しいというところまで聴力が落ちていました。しかしその人は、1年生の5月の連休明けぐらいには、このままだと私は単位取れないということに気付いたわけです。高校までと違って教科書もないし、あっても教科書にはほとんど触れない、あるいは教科書の最初の1ページで10回分の授業が終わるみたいなそういう大学ですし、先生も判別不可能なぐらいボソボソと喋っている。あるいは板書するけれども、ドイツ語で誰も理解できないとかそういう授業ばかりだったので、このままだと私単位取れないと5月の連休明けに彼女は気付いたわけですね。そして、僕が手話ができることをその人は知っていたので、僕のところに来て手話通訳をしてもらえないかと頼むんです。でも、その

人は手話を全然できないのです。私は、その人に「普通高校から来ているから、できないでしょう。」と言ったら、「今から私覚えるから。」と言って、二つ上に手話のできる先輩がいたので、そこに入り浸り、地域の手話サークルとか、手話通訳を養成する入門講座みたいなところにも自分からアプローチして1カ月ぐらいで手話ができるようになるんです。ところがその人の苦しさはそこから始まるんですね。手話はリアルタイムに何を言っているかが分かるし、リアルタイムに何を笑っているのかが分かる言語なんですね。だけど、高校までどう過ごしてきたかと言ったら「なにになににちゃんもそうだよね。」と言われたら、何を言っているか分からないけど「うん。」と言ってニコって笑って、周り人間関係を作っていたんですね。みんなが笑っているとよく分かんないけども一緒に笑って、頭の中では「あれ？何で笑っているのかな？」と思いながら一緒に笑っていた。そういうようにして、人間関係をこれまで作ってきた。ところが手話はリアルタイムに何を言っているか分かるし、リアルタイムに何を笑っているか分かるので、そういう果実を口にしてしまったので、もう戻れなくなっちゃったんです。「何々ちゃんもそうだよね。」と言われて、「うん。」と言えなくなりました。みんなが笑っている時に一緒に笑う。よく分からないのに笑うっていうこともできなくなりました。つまり、聞こえる人たちの中に入れなくなっただけですね。だからといって、手話を一生懸命勉強してすぐできるようになったんだけどまだ1カ月ですし、手話で盛り上がっている中に入れるほどの手話力があるわけではないから、聾者の世界にも入れない。そして、一体自分は何者なのかということで、すごく苦しい思いをすることになります。なんか不安定な自己認識ということです。2年ぐらいすごく大変だから、聞こえる人たちの中では「私は聾者です。」と言うけど、聾者の中では「私は難聴者です。」と言い、相手によって自分の言い方を変えるという不安定さを自分で感じているから、非常に不安定な自己認識になっていきます。ただ、最終的には手話の方にガツと振り切れて、今は両方とも大切な言語だと思うようになっていっているので、結果オーライなのですが、すごく大変な思いをしています。

もう一つは普通高校から来た学生で、聾学校へは幼稚部も含めて全く行っていません。その学生は、大学で初めて手話サークルに入り、手話に出会ったんですね。その人は結構聞き取りも良かったし発音も比較的明瞭だったので、聞こえない人とか手話サークルの人たちとは手話で話をしても、学類の聞こえる友達とは音声で話をするというように、音声と手話という2つの言語を自分の中で、整理して学んで、整理して使っているなど私には見えていました。ところが、その学生が大学3年生の時に彼が小学校時代に1番嫌だった時間は、自分の将来の夢を聞かれることだということを初めて言ってくれたんですね。難聴学級にも聾学校にも行っていないので、この世の中に耳が聞こえないのは自分だけだと思っていた。みんなは聞こえて、世界中で耳が聞こえないのは自分だけだと思っていたんですね。だから将来の夢を聞かれて、例えば電車の運転手になりたいけど聞こえない電車運転手なんていないし、大学の先生になりたいけど聞こえない大学の先生なんていないし、学校の先生になりたいけど聞こえない学校の先生なんていないし、何を言っても聞こえない人はなれないと思っていたので、夢を聞かれるのが1番嫌だったということ、その人が大学3年生の時に初めて言ってくれたんです。僕はその話を聞いた時に、本当に胸が締め付けられる思いでした。すぐそばの難聴学級やすぐそばの聾学校には、同じ聞こえない仲間たちがたくさん学んだり遊んだりしているわけです。すぐ隣の小学校ではこんな聞こえないお友達がいてこんな夢に向かって頑張っているよとか、聞こえない大人がこんなところで活躍しているよということを、なんで周りの大人はその人に伝えてあげなかったんだと思いました。でも、当時はこのような人たちはみんな聾学校からではなく、普通高校から来た人たちです。聞こえない人たちが聞こえる社会で生きていくというのは、大変なことなのだろうと思います。心理的な負荷がかかるし、場合によっては背伸びをしなきゃいけない場面というのもあるかもしれません。

また、筑波技大の同級生の話ですが、当時筑波技大は短大だったので3年で卒業でした。その女性はすごく優秀だし性格も良くて明るくムードメーカーだったので、大きな会社にあつという間に就職が決まっていわけです。たぶん仕事上もほとんど問題なくやれていたと思うんですね。そして、1年後に同窓会があつて、彼女が同窓会に来てくれた時に彼女から聞いたエピソードです。「明後日朝9時に会議があるから会議に来て。」と上司に言われて、「あ、分かりました。じゃあ9時に行きます。」と言ったんですね。ところが、次の日の朝礼で「9時に別の会議がある。10時に会議があるから10時に来てね。」と上司に言われた。そして、「分かりました。」と言ったのですが、次の日になったら朝礼で「今日10時から別の会議が入ってしまったので、10時からの会議は9時からに変更します。」と言われたんですね。でも、それが聞き取れなかったんです。そして、彼女は10時に会議室に行ったら全然違う会議が開かれていて、「あれっ。」と思って自分の席に戻ったら上司が「さっきの会議はなんで来なかったの。」と言われて、「いやあの10時だと思っていたんですけど。」と言ったら、「今朝の朝礼で9時に変更というふうに言ったんだけどなあ。」と言われて、「すいません、それ聞き取れませんでした。」と言ったら、全然怒っているわけではないんですが、「ああ、そうかそうか。聞いてなかったんだ、分かったよ。でも、これから分からないことがあったら、何でも俺に聞いて。」と言って去っていったらしいんですね。でも、変更したという事実さえ分からないのに、どうやって上司に聞けというんだという、こうモヤモヤした思いで上司を見送ったという話です。別にそれでなんか不適応を起こしたとか、上司に怒られたとかそんなのではない。でも、不条理ですよ。「変わったということさえ知らされていないのは、どうやって聞けというんだ。」となります。そのような小さなことが、聞こえる人たちの中でやっていくといういろいろとあるんですね。その時に彼女はどうやってストレス解消しているかと言うと、当時東京で働いていたんですけど、東京にはカルチャーセンターみたいにお金を払って英語やフランス語を学ぶのと同じように手話を学ぶところがたくさんあったんですね。そういう所で手話を教えるという講師を土曜日とか日曜日にやって、しかもちゃんと教えるためのトレーニングも受けて、そして終わったら聾の講師同士で反省会もかねてお酒を飲みながらいろんな話をして、そこでエネルギーをもらって、「よし、また聞こえる人の中で頑張ろう。」と思って働き始めるわけですね。聞こえない人たちが、聞こえる人たちの中で生きていかなければいけない。だからこそ、聞こえない人たちの集団とか仲間というのはすごく大切なのだと思います。そこでストレス解消したり、いろんな話を聞いてもらったり、勇気付けられたり、エネルギーをもらって、また聞こえる人の中で頑張ろうと思える。だから、聞こえない仲間がいて聞こえない集団を体験しているからこそ、本当に自分に自信が持てると思いますし、聾学校というのは先輩後輩ということも含めてその聞こえない集団をきちんと保障してくれる場だと思います。そう考えると、やはり学力だけで幸せになれるかと言うと、そうではないと思うことがすごく多いです。特に、筑波の学生とか筑波技大の学生を見ていると、学力よりも大切なものがあるのではないかと書きましたが、学力はどうでもいいと言っているわけでは全然ありません。でも、学力だけですべてが解決するわけではないということです。

聞こえない子どもたちの「アイデンティティ」に影響を与える要因は、大きく四つ挙げられています。

一つ目は、聞こえない子たちの同年齢集団です。これは聾学校にいれば確保できます。同じ聞こえない仲間たちの中で育つということです。自分だけではない。さっきの事例ではないですが、聞こえないのは自分だけではないという思いが生まれる。

二つ目は、成人聾者との出会い。聞こえない大人との出会いもとても大切です。これも聾学校だったら保証されます。聾学校の先生もいますし、幼稚部の子たちにとっては高等部のお兄さんお姉さんはとても大きな憧れの存在です。幼稚部の子たち

ろう児のアイデンティティ に影響を与える要因

- ・ ろう児の同年齢集団
→ かかとをつけて話せる集団
- ・ 成人ろう者との出会い
→ 自分の将来像を形成するモデル
- ・ 手話との出会い
→ ろう者の母語
- ・ 親や教師の障害認識
→ 親や教師が「ろう」をどう捉えるか

は、一緒に手を繋いで引っ張ってくれる高等部・専攻科の生徒を見る目がキラキラなんです。しかも、その姿を見ている幼稚部の保護者は、目に涙をいっぱい浮かべて我が子の将来像をそこに重ねるというすごくいい場面があったんですね。きっと彼らの心の中には、専攻科生徒のあの姿というのはきっと刻まれるだろうと思います。

三つ目は、手話との出会い。手話と出会うことで、きちんと分かる言葉に出会う。それは「アイデンティティ」を形成する上でもとても大きな役割を果たします。今はいろんな聴力の子たちがいるので、以前のようにはいずれでも、手話が大きな役割を果たすということは、その通りかなと思います。なぜかという、聞こえの部分だけに着目するとどうしても自分の捉え方が「1-a」になりがちなのですね。聞こえている人たちから聞こえの部分を取り除いたのが自分なんだ、と捉えがちですけど、手話と出会うことで、聞こえる人は音声を使う人、自分は手話を使う人、耳を使う人、目を使う人、使う感覚は違うけれども、使う言語や使う手段は違うけれども、同じ仲間なのだというように対等の「1」と「1」と見られるようになるので、手話の役割もすごく大きいと思います。

四つ目は、1番お伝えしたいことですが、親や先生が「聞こえない」ことをどう捉えているかが、聞こえない子どもたちが自分の「聞こえない」ことをどう捉えるかに非常に大きな影響を与えるということです。例えば、「あなたは聞こえないんだから、聞こえる人の5倍も10倍も努力して、聞こえる人たちに近づくために頑張りなさい。」と親が思っていて、それを子どもに伝えたら、たぶん子どもはその方向に向かって走ります。でも、どんなに努力しても、聞こえる人に近づくことができて、聞こえる人になることはできませんので、到達できないゴールに向かって走れと言っていることになりすから、どこかでやはり折れてしまう。では、周りの先生やお母さんお父さんは「聞こえない」ということをどう捉えるかということが、子どもの障がい認識、「聞こえない」ということの捉え方に大きく影響するのだということです。少し具体的に言えば、5歳とか小学校1年生ぐらいの時に、ある日突然その瞬間がやってくるんですね。もうすでにそういう経験をされた保護者の方はいらっしゃるかもしれません。「ねえ。なんで私の耳にだけ補聴器付いているの?」「私大きくなったら補聴器取れるの。」ということを書いてくる瞬間がおそらく来ます。その時に親や先生がどう返してあげるかということが、まさに私たちが問われている障がい認識だと思います。皆さんだったらどう答えるでしょうか。全然正解だと思わないでください。私だったら、いろいろ考えながら、今の私だったらこんなふうに言うかなということなのですが、

「じゃあ逆に聞けど、補聴器をつけている人って他に誰がいる?」

「友達の〇〇君。」

「なににな先生もそうやね。」「じゃあ補聴器をつけてない人って誰がいる?」「お父さんお母さんお兄ちゃん、なんとか先生なんとか先生もそうだね。そしたらあなたは?補聴器をつけている人、つけてない人どっちの仲間?」

「つけている人。」

「お母さんはどっちの仲間?」「つけてない人の仲間。」

「そうだよね。」終わり。

この言わんとしていることは何かというと、この世の中には眼鏡をかけている人かけてない人、あるいは男性と女性のようにいろいろいるのと同じように、補聴器をつけている人と補聴器をつけていない人がいる、聞こえている人と聞こえていない人がいる。それは上とか下とかではなくて、そういう2つのタイプの人たちがいるんだ、あなたはこっちの仲間、でもお母さんやお父さんや先生はこっちの仲間というふうに右と左の違いだよ。上と下の違いじゃなくて、右と左の違いなんだよということを今の私だったら子どもに伝えるかなと思っています。皆さんだったらどう答えるか。聞かれたらどう返すかというのはぜひ考えてみてほしいなと思います。

それから、少し夢のある話をしたいと思います。今聞こえない人たちでなれない職業というのはありません。本当に手話ユーザーでお医者さんになっている人はあまりいないんですけども、補聴器や人工内耳を使ってお医者さんになっている人は30人を超えていますし、今医学部で学んでいる聴覚障がい学生も2、30人います。教員とか弁護士とか、このような仕事にたくさん聴覚障がいのある人がなっています。もちろん適性というものがありますから、誰でもなれるわけではありません。聞こえる・聞こえないは関係ないですよ。聞こえる人が誰でも医師になれるかと言ったら、やはり勉強の力が医師の場合は求められるし、聞こえる人だったら誰でも俳優になれるかと言ったら、それはやはり適性というものがあります。でも「聞こえない」ということが、一義的に何かになれないという時代ではもはやなくなりました。だからなりたい、こういうふうに生きていきたいと思ったら、今は何にでもなれる時代です。

全聴教という聾の先生たちの集まりがありますが、そこで今本を作っています。来年に刊行予定と聞きました。新型コロナの影響でのびのびになっていますが、どういう本かという、日本で聞こえなくていろんな職業に就いていろいろな生き方をしている聾者の写真とかインタビューというのをまとめた本が出る予定です。例えば、滋賀なんかではタヌキをひたすら作っている信楽焼職人さんがいたり、石川ではアメリカなどに行って聾の人に九谷焼の絵付けを教えている人がいたりとか、イタリアンのお店を自分で持ってイタリア料理を提供している人がいたりとか、本当にいろんなタイプの聾者を紹介した本が出るんですね。それを見ると、聞こえない人たちが聞こえないことだけを理由に、その未来を閉ざされるということはないと思っています。適性はあるんですけど、何にでもなれる。では、聞こえない人として生きていく時にどんな人が就職できるのか、長続きするのかと言った時に、データとしては少し古いんですけども、東京で何千人という聴覚障がいの人たちの就労相談を受けてこられた野沢先生の講演の中から取ってきたものです。

どんな人が就職できるのかは、一つは障がい認識ができており、明るく安定した性格とアイデンティティのある人です。ここでいう「障がい認識」は、さっきの意味と少し違うんですけど、要するに自分の「できること」「できないこと」をきちんと自分で分かるという意味です。だから、「何でもできます。私頑張ります。」じゃなくて、「電話はできません。」とか「会議だと誰かノートテイクしてくれると助かります。」みたいに、自分の「できること」「できないこと」をきちんと分かって伝えられる人は長続きするけれども、「頑張ります。」「努力します。」という人は長続きしない。それで失敗して、そこでやめてしまったり病気になったりする。そういうことを言うんですね。もう一つは、「社会性」より「社会力」。本当に私はその通りだと思うんです。「社会性」という言葉は、どちらかというと、聞こえる人たちに聞こえない人たちが合わせる。悪く言えば迎合するみたいなイメージがありますが、そうではなくて聞こえる人たちをも変えていく力がやはり求められているということですね。これも私の同級生の事例で、筑波技術短期大学の同級生で女性ですが、とても優秀で明るい子であつという間に就職が決まって働き始めます。ほとんど問題なく仕事を続けますが、お昼になると他の社員は仲の良い人たちでランチに出て、気がつくとき周りには誰もなくて、その子はオフィスで自分が持ってきたお弁当を1人で食べる時期が続いたらいいですね。彼女はそれを少し寂しいと思ったんです。それでどうしたかということ、同じように1人でお弁当を食べている比較的仲のいい同僚がいたので、その子に声をかけて「一緒に食べよう。」となった。そこで勇気を出してその同僚に「手話を覚えてみない？」と提案して、その同僚も賛同してくれて2人だけの手話講習会が始まることになります。しばらくすると、ランチに出ていた人たちが私も手話を覚えたいと言って2人だけだったのが、3人になり4人になりとどんどん増えていきました。そしたら、それを知った上司が、「自

聴覚障害者として生きる
—どんな人が就職できるのか—

- 手話か口話かに限らず、しっかりと話ができる。
- 読み書きの力が高い。
- 障害認識ができており、明るく安定した性格とアイデンティティ。
- 様々なメディアを活用して情報量が多い。
- 社会性より社会力。

分の部署に聞こえない仲間がいるのに、手話を学ぶ時間がお昼休みの勤務時間外になっているのは問題だ、それだったら朝礼の時に今日のワンポイント手話という時間を作るから、その時間に手話をみんなに教えてくれないか。」ということを提案されるんですね。そのころには簡単な手話ができる同僚もたくさんいるようになり、お昼に1人で残されることもなく、ランチにも誘ってもらえるようになり、職場もみんなわずかながらでも手話を使えるようになっていったという話です。つまり、「周りは音声だから音声で合わせましょう」じゃないんですね。周りの聞こえる人たちをも変えていく、そういうバイタリティのある聞こえない子どもたちに育ててほしいと思います。それが「社会性」じゃなくて「社会力」なんだと思います。

次に、「セルフアドボカシー」とか「合理的配慮」の話です。「合理的配慮」はすごくよく聞きますよね。今とても誤解をされている言葉だと思います。合理的配慮という語は誤訳だと私は思っていて、「配慮」という言葉が1番問題だと思うんですね。一般的な「配慮」というのは、「本人が言葉にしなくても周りの人がその人のことを慮っていろんなことをしてあげる。」というのが「配慮」なんです。ところが、これを「合理的配慮」に持っていくとどうことが起きるかという、この会場に聴覚障がいのある人がいるから私が良かれと思って手話をしながら全部この話をしたとしても、その人は実は全然手話は分からなくて、文字情報として理解したい人かもしれない。良かれと思ってノートテイクをつけたり UD トークを使ったりして文字情報を提供したとしても、その人は音声として実は話を聞きたい人かもしれない。同じ90dBの難聴の人でも、ある人は手話がいい、ある人は文字が欲しい、ある人は音声が欲しい。だから、そんなの周りが慮ってしたってありがた迷惑なんですね。だからといって、言ってもらわないと何をして欲しいかが分からない。「合理的配慮」というのは、周りが慮るものじゃないんですね。元の英語は「リーズナブルアコモデーション」なんです。「リーズナブル」というのは「理にかなった」とか「合理的な」ですが、こっちはこれでいいんです。問題は配慮でしょう。「アコモデーション」はどういう意味かというと、辞書を引くと「ホテル」とか「宿泊先」とかいう意味で最初に出てくるんですが、その次に「便宜」とか「調整・調節」という意味で出てくるんですね。ですから、直訳の「理にかなった調整」が、実は「合理的配慮」の最も正しい意味だと私は思っています。例えば、この場に聴覚障がいのある人がいて、良かれと思っていろいろなことをしたとしても、その人のニーズと合わないかもしれない。言ってもらわないと分からない。そのかわり言ってくれたら、どうしたらいいかを一緒に考えていく。もちろん提供できるものは提供すべきですが、それができない場合もあるわけです。できない場合には、「代わりにこういう方法だったら提供できるんだけど、どう？」という話をする。「建設的対話」と言われるものですね。それで話をして、「これは納得できない。」という場合でも同意・合意できるところを探り、お互いに納得できたら「合理的配慮」の提供をスタートしましょうということなんです。大学のノートテイクの例を挙げると、金沢大学に入学したある学生が私の10コマの授業すべてに手話通訳をつけてほしいと言ってきたとします。でも、大学はノートテイクや UD トークの提供はできるが、手話通訳となると大学の中にそれだけの手話通訳ができる人材がいないのですぐには提供できない。しかも、それを聴覚障がい者センターに外注して派遣してもらうと、一コマ大体3万円ぐらい、週に10コマだと30万円ぐらいかかる。毎週だと、大学としては難しい。その時に「本当は手話通訳がいいけれど、難しいのでノートテイクでもいいです。」と言ったらそこで交渉が成立するので、「では来週からノートテイクをつけますね。」という話になるし、「どうしても手話通訳がいいです。」という場合は、おそらく「今期は10コマ全部につけられないが、まずは3コマだけはつけて残りの7コマはノートテイクでなんとか我慢してほしい。その3コマが4コマ5コマになるために、学内で手話通訳ができるような人材を養成する企画をしていくので、そこに一緒に協力できる人を広げていくような取り組みを一緒に考えていこうね。」という形になります。それが「建設的対話」であり、「合理的配慮」になる

わけですね。だから「合理的配慮」のスタートは、本人の支援要請なんですね。黙っていても周りが何かしてくれるのが「合理的配慮」ではないんです。「私はこういうことをしてほしいです。」と言えば、社会はそれに対して必ず応じる義務があります。「その通りにできなくてもこれだったらできるよ。」という少なくとも交渉のテーブルには必ずつかなければいけません。だけど、「私大丈夫です。頑張ります。口を見れば分かります。」という人には「口を見て分かるのね。じゃ頑張ってるね。」となって、その結果として分からない状況やできない状況があっても「あなたは自分で分かると言ったよね。」と自分の責任になるんです。より厳しい時代になったと思います。

学校では何をしなければいけないかと言ったら、もちろんできないことをできるようにするということが学校の大きなミッションですので、それはもう当たり前です。特に聞こえに関しては、努力でできるようになることと、努力でできるようにならないこともあるので、「こういうことはできる、でもこういうことはできない。」ときちんと自分のことを理解しておくこともすごく大切だと思います。例えば、「音声で話をされても自分は理解できない。」「電話はできない。」というように、自分のできないことをきちんと知っておくことがすごく大切だと思います。ただし、できないことは必ずできることの裏返しなんです。「音声では理解できないけれども、紙に書いてもらおうと分かる。」とか、「音声では理解できないけども UD トークを使ってもらったら会議には参加できる。」とか、「電話はできないけれども、メールだったら理解できる。」というように、必ずできないことはできることの裏返しなので、「こういうことはできない。」「苦手だ。」ということをきちんと自分自身で理解して、「こういうようにしてほしい。」「こういうようにしたら自分はできる。」ということを社会に伝えていく力が必要なんですね。それがいわゆる「セルフアドボカシー」と言われているものです。これが特に社会に出ていく上で、すぐ求められます。私は大学で障がい学生支援室の室長ですが、本人が言ってこない限り大学は支援しません。聴覚はそのような学生はあまりないんですが、発達障がいのある学生でどう考えても支援必要だと思う学生でも「いや大丈夫です。」という学生には支援しません。でも私としては、支援しないという支援をしているつもりなんですね。だから見放さない。ことあるたびに声かけして、呼んできて様子を聞いて「診断書があって支援を必要だということであれば、こういうことができるよ。でも、今まで通り何もいらないというんだっとなしにする。どうする？」ということを常に本人に問い続けながら自己理解を促していく。あるところで単位が取れなくてお尻に火がつくので、その時点で結構変わってきます。ですから、「自己理解」というのがすごく大切になってくる。しかし、「自己理解」をするには、どうしても自分の苦手なところやできないところに自分の目を向けないといけないんですね。それは、私たち聞こえる人間でもしんどい作業です。それをできるようにするためには、やはり最初の話に戻っていくんです。幼児期に分かる経験やできる経験を十分にすることで自分に対する自信や自己肯定感をしっかり持ち、しかも幼児期にたくさん人に「ありがとう。」と言われる経験をすることで「自己理解」力も有するようになるのです。つまり、自己肯定感をバネにして、自分の苦手なところに目を向けるというその両方が必要なんですね。でも自己肯定感がすでに下がっていて、特に高等部ぐらいで下がってしまっていると、この「自己理解」はすごく難しい。やればやるほど自信を失っていった、何のための「自己理解」の授業なんだかが分からなくなるようなことになるので、結局、自己肯定感を高めるということがないと難しい。でも、それを高めるためには最初の話「コミュニケーション」というそこに戻るということになるわけです。

ここには、中軽度難聴とか人工内耳を上手に使っているお子さんの保護者の方も多くいるかと思います。中軽度難聴とか人工内耳の子ども達って、実は落とし穴がすごくたくさんあるんですね。補聴器の子達って発音が不明瞭なので、周りの大人が本当に分かっているのかどうかということを常に確認してくれたんですね。でも、中軽度難聴とか人工内耳の子は発音明瞭なので、分かっていると周りが思ってしまう。そうすると、その子のしんどさに気付くのがものすごく

く遅くなってしまうんですね。ですから、いくつか見ていかなければいけないポイントがあって、特に日本語力ということに関して、聾教育の先人たちがいろんな有名な言葉を言っているんですが、それは本当にその通りだなと思うんですね。

一つ目は「5歳のだらだら坂」という言葉があるんです。4歳から5歳ぐらいにかけて、少ししんどさが続く時期があるんです。それは何かというと、4歳ぐらいまでは大人がさっきの矢印を伸ばして理解してくれる。そういうコミュニケーションだったのが、5歳になると言葉だけでやり取りをし始めるし、言葉だけで説明されて何を言っているかが分かる時期になっていくんです。そこでつまづくポイントがあるんですね。ただし、私が見ていると人工内耳を上手に使っている子たちはそこはあまりつまづきません。そこはうまく乗り越えていく子たちが多い気がしますけども、一つの山はそこです。

二つ目は「9歳の壁」と言われているところです。それは何かというと、教科書を見たら分かります。2年生までの教科書は、国語も字句どおりに読んでいたら答えが書いてあるという内容なんですね。皆さん、覚えていますかね。『スイミー』とか『くじらぐも』とかいうような内容は、そのまま読んでいたらそのまま分かるという教材なんですね。ところが3年生になるとそのまま理解するだけでは分からなくなります。例えば、聾学校の先生泣かせの教材として、『ちいちゃんの影送り』という戦争教材があります。実はちいちゃんはまだ死にそうで、すでに亡くなったお兄さん・お父さん・お母さんの幻視を見ているんです。これは幻影ですが、本当は死にましたとかどこにも書いていないんです。だけど、それを文章を通して理解しなければいけない。また、『3年峠』という話を覚えていますかね。ここで転んだら3年しか生きられないと言ってへこんでいるおじいさんに対して、2回転んだ6年、3回転んだら9年生きられるといてそこで転びまくるという話なんですけど、同じ「3年生きる。」でもここで転んだら「3年しか生きられない。」というのを「3年生きられる。」と読み替えていく面白さを感じられるためには言葉の世界に入っていけないと難しくて、字句通りではないんですね。そこでつまづく子が多い。つまづく子も日常的なやりとりはすぐできるんです。学校での出来事について、それなりにしゃべります。でも、「分数の割り算は、割る数の分母と分子を入れ替えて、分母同士分子同士をかければできます。」みたいなになると、「何のことでしょ。」となってしまう。でも発音明瞭なので、周りからは心配されずに大きくなってしまいます。聾学校にいる子たちは先生がすぐ見てくれるので早めに問題を把握できますが、通常小学校にいる子たちはそこでしんどさを覚えます。つまり、そこを注意してほしいと思います。特に言語理解に関しては、『J.Coss』などのいろんな検査があります。聾学校では定期的にそういう検査を実施しています。本当に学年相応の言葉の力はついているのかということを、定量的に評価していくことが、特に補聴器を活用している子については見ていく必要があると思っています。

最後に、少なくとも聾学校にいる子たちは、日本語という言語と手話という言語の2つの言語を持っていほしいと思います。聴覚が上手に活用できる子であればそれはそれで活用すればいいし、音声も使っていってもいいし、自分が使いやすい法を使っていけばいいんです。でも、それに加えて手話という言葉を持っていることは、その子のQOLを必ず上げることに繋がります。人間関係も広がりますし、「自己理解」ということも深まります。必ず世界を広げることになりますので、手話と日本語との2つの言語を持って社会に羽ばたいてほしいと思っています。手話は、聞こえないから、仕方ないから使うというものでは決してありません。先ほども言いましたように、「アイデンティティ」にも関わってくるし、自分に自信が持てるようになるためには、分かる手段が1つよりも2つのほうがいいに決まっているわけです。日本語しかできない人より、日本語と英語ができる人の方が世界は広がるのと同じように、音声しかできない人よりも音声も手話もできる人の方が絶対に世界は広がりますので、そのように子どもたちを育ててほしいと思います。私の話は以上です。

最後に

私の願い

○ ろう学校に在籍するすべての聞こえない子どもが手話と日本語の2つの言語をもって、社会に羽ばたいてほしい。

→ 手話は音声聞き取れないから仕方なく使うものではない！

→ 手話はアイデンティティに密接に関わる。

→ 手話に出会うことで自分に自信が持てる。

→ わかる手段は1つより2つある方がいい。

大会実行委員長挨拶

「家庭教育を考える部会 2025 年福岡」

実行委員長 崎田 正一郎

(福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校 PTA 会長)



昨日と本日と『家庭教育を考える部会 2025 年福岡』にご参加をいただきまして、誠にありがとうございました。

実行委員会といたしまして皆様のご協力により本大会が開催できましたことを心より御礼申し上げます。

本大会の主幹である九州地区ろう学校 P T A 連合会では、参加された方々にとって有意義な時間になりますよう準備を進めてまいりました。

昨日、井料先生の問題提起の後、グループに分かれ研究協議をさせていただきました。私も一人のメンバーとして皆さんのご意見や経験を聞かせていただきまして、本当に頭が下がる思いばかりでした。

そして今日、武居先生の経験と努力、人生 3 回分ぐらい生きてきたくらいの濃い話をさせていただきました。

ここに今、約 100 人の方が集まっていっしゃる。世界の人口が 80 億人と考えると、確率的には宝くじに当たるくらいの確率だと思われます。そして、二人の素晴らしい先生をお招きしてお話を聞かせていただいたこと、皆さんとめぐり合わせていただいたことを私も今後に生かしていきたいと思います。皆さんも、昨日今日ですごいエネルギーをいただいたと思います。その力をこれからも子どもたちのために、P T A として汗を流させていただきたいと思います。

最後に一つだけお願いをさせていただきたいと思います。私は阪神大震災の時から災害ボランティアを続けてきました。その中で、大変つらい経験を 1 回しました。ある地域で大きな地震があって、1 週間後に被災地に行かせていただきました。その避難所は、広い駐車場に 5、60 台車が停まっていて、その一角に私たちはテントを張らしていただき、1 週間災害救援をしました。地震後 1 週間ぐらいですから、余震も凄くて、家の中で寝られる状態ではないので、皆さんは車の中で寝ていました。1 日 1 回役所から食料が届きます。おにぎりが届きました。パンが届きました。弁当が届きました。皆さん必死に取りに来られていましたが、取りに来ることができないのは障がい者ばかりでした。当然マイク放送ですから、耳が不自由な方はおにぎりにもありつけない、それをまざまざと見ました。北九州市では今、小学校の体育館や中学校で避難所を開設する訓練を数年前から行っています。今年になって私が町内会長に頼まれて、一人しかいない防災部長を引き受けました。先ほどの経験を生かして、身体の不自由な方も安心して避難できるような取り組みをさせてもらいたいと、町内会長さんや役員さんと相談しています。

どうぞ皆さん、日本はどこで災害が起こってもおかしくありませんので、地元に戻られたら、耳の不自由な方も含めて障がい者の方が避難所でつらい思いをしないように、これを機会に考えていただきたくことをお願いさせていただきまして、私の挨拶とさせていただきたいと思います。昨日今日と、誠にありがとうございました。

令和8年度開催要項

「家庭教育を考える部会2026年盛岡」について

この度、全国ろう学校 PTA 連合会主催「家庭教育を考える部会 2025 年福岡」が、福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校 PTA 様ならびに九州地区ろう学校 PTA 連合会様のご尽力により無事開催されましたことを感謝申し上げます。

主管地区事務局では、開催に向けて準備を進めています。

- 1 趣 旨 社会状況の変化とともに聴覚障がい児(者)を取り巻く環境も大きく変化する中、子供たちの生きる力を育むために地域や学校と連携した家庭教育の在り方を考える。
- 2 期 日 令和8年11月6日(金) 13:30～17:00
7日(土) 9:30～11:30
- 3 会 場 岩手県民情報交流センター「キオクシアアイーナ」
〒020-0045 岩手県盛岡市盛岡駅西口1丁目7-1
- 4 主 催 全国ろう学校PTA連合会
- 5 主 管 東北地区聾学校PTA連合会
- 6 事務局 岩手県立盛岡聴覚支援学校PTA
- 7 協力PTA 岩手県立一関清明支援学校 PTA 青森県立青森聾学校 PTA
青森県立青森弘前聾学校 PTA 青森県立八戸聾学校 PTA
秋田県立聴覚支援学校 PTA 山形県立山形聾学校 PTA
山形県立坂田特別支援学校 PTA 宮城県立聴覚支援学校 PTA
宮城県立聴覚支援学校小牛田校 PTA 福島県立聴覚支援学校 PTA
福島県立聴覚支援学校福島校 PTA 福島県立聴覚支援学校平校 PTA
福島県立聴覚支援学校会津校 PTA
- 8 研究協議 助言者:株式会社ヘラルボニー 菊永 ふみ 氏
- 9 講 演 講師:亜細亜大学 橋本 一郎 氏
- 10 備 考 家庭教育を考える部会の開催は、第60回全日本聾教育研究大会青森大会と連動しています。同大会は青森県で開催されますが、本部会は主管校や交通アクセスの状況等に鑑み、盛岡にて開催します。大会に向けてご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(事務局:岩手県立盛岡聴覚支援学校 PTA)

全国ろう学校PTA連合会

「家庭教育を考える部会 2025 年福岡」実行委員会

大会事務局 福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校PTA

協力PTA 福岡県立小倉聴覚特別支援学校PTA

福岡県立福岡聴覚特別支援学校PTA

福岡県立久留米聴覚特別支援学校PTA

福岡県立直方特別支援学校PTA

佐賀県立ろう学校PTA

長崎県立ろう学校PTA

協力 表紙：福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校生徒

熊本県立熊本聾学校PTA

大分県立聾学校PTA

宮崎県立都城さくら聴覚支援学校PTA

宮崎県立延岡しろやま支援学校PTA

鹿児島県立鹿児島聾学校PTA

沖縄県立沖縄ろう学校PTA

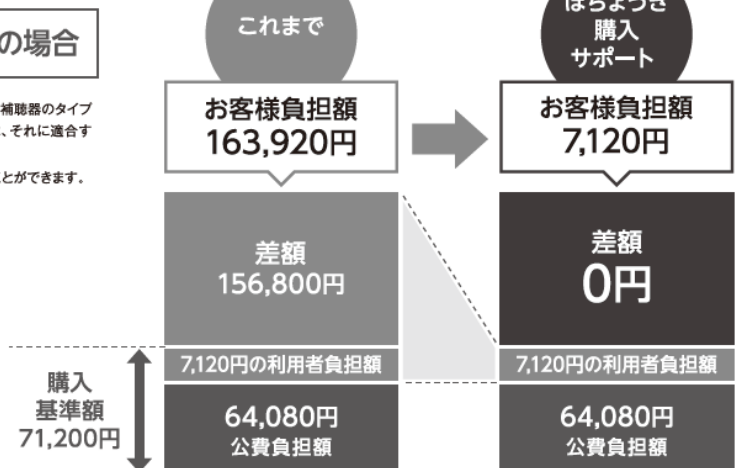
補聴器をお求めやすくする「ほちょうき購入サポート」

リオネット補聴器は、20歳以下の方を対象に、補聴器をお求めやすい価格で、数多くの機種の中からお選びいただける「ほちょうき購入サポート」を実施しています。

例えば 228,000円の補聴器の場合

※「補装具費支給意見書」や「補装具費支給券」に補聴器のタイプ（形状や適応難聴度）が記載されている場合は、それに適合する範囲でお選びいただけます。
※「補装具費支給券」が発行された際に利用することができます。

利用者負担額
購入基準額の1/10
重度難聴用耳かけ型の購入基準額
71,200円
公費負担の割合
国 50/100
都道府県 25/100
市町村 25/100



※購入基準額には別途、特別加算(6.0%)が加わる場合があります。
※デジタル式補聴器で、補聴器の装用に関し専門的な知識・技術を有する者による調整が必要な場合は、2,000円が加算されます。
※身体障害者手帳をお持ちの場合の適用例です。

詳しくは、**リオネット 補聴器購入サポート** で検索！

RIONET

障害のある方向け総合保険

あ！それウチかも
と思った方

入通院の悩み

- ・突然の病気やケガが心配
- ・入院時の出費に備えたい
- ・障害があっても入れる保険を探している

賠償の悩み

- ・パニックになって他の人にケガをさせてしまったらどうしよう
- ・デイサービスでヘルパーさんのメガネを壊してしまった

相談しにくい悩み

- ・虐待や差別を受けた
- ・詐欺に遭わないか心配

障害のある方とそのご家族へ

ぜんちの

あんしん保険

- ・病気とケガにしっかり備える
- ・告知不要
- ・障害者手帳不要
- ・入院日額最高1万円
- ・権利擁護費用補償
- ・総合生活保険(個人賠償責任補償)で賠償責任を補償(国内は東京海上日動の示談交渉サービス付き)

特別支援教育を必要とされている方へ

ぜんちの

こども傷害保険

- ・特別支援教育を必要とされているお子様に
- ・ケガによる入通院を日額保障
- ・権利擁護費用補償
- ・総合生活保険(個人賠償責任補償)で賠償責任を補償(国内は東京海上日動の示談交渉サービス付き)

詳しい資料のご請求・お問い合わせはこちら

ぜんち共済株式会社
ZENCHI
〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-5 九段北325ビル4階
URL: <https://www.z-kyosai.com/>

関東財務局長(少額短期保険)第14号

0120-322-150

平日9時～17時/土日・祝日・年末年始を除く

※このご案内は、保険の概要についてご紹介したものです。契約にあたっては「ご契約に際しての重要事項」「約款」東京海上日動の「重要事項説明書」をよくお読みください。ご不明な点等がある場合は、ぜんち共済株式会社までお問い合わせください。補償を受けられる方またはその家族が、補償内容が同様の保険契約を他ににご契約されているときには、補償が重複することがあります。

25TX-004122(2025年11月作成) Z012-2510R00

補償制度のご案内

A I G 損保の聾学校生徒のための総合補償制度について

(傷害総合保険、通院保険金支払限度日数短縮特約 (30 日限度)、地震・噴火・津波危険補償特約、通信販売に関する特約等セット)

AIG 損害保険株式会社では特別支援学校に通う生徒のための総合補償制度を長らくご案内してきました。地震の際のケガも補償されるプランになっております。24 時間補償されます。初年度に申し込みされると翌年度から自動更新されますのでご加入者にとっても便利な制度です。保険期間：1 年

	補償内容	プラチナプラン	ゴールドプラン	ブロンズプラン
責 任 人 補 償	個人賠償責任 日常生活上の偶然な事故により他人 に対する法律上の損害賠償責任を負 った場合 (※1) (※2)	1 億円 (1 事故あたり支 払限度額)	1 億円 (1 事故あたり支 払限度額)	5,000 万円 (1 事故あたり支 払限度額)
傷 害 (ケ ガ) 補 償	死亡保険金 ケガで死亡した場合	348.7 万円	400.9 万円	396.0 万円
	後遺障害保険金 ケガで身体に後遺障害が残ったとき	障害の程度に応じて 約 13.9 万円~348.7 万円	障害の程度に応じて 約 16.0 万円~400.9 万円	障害の程度に応じて 約 15.8 万円~396.0 万円
	入院保険金日額 ケガで入院したとき (180 日限度)	4,000 円	3,000 円	2,000 円
	手術保険金 ケガで所定の手術を受けたとき (1 事故あたり 1 回)	入院中 4 万円 入院中以外 2 万円	入院中 3 万円 入院中以外 1.5 万円	入院中 2 万円 入院中以外 1 万円
	通院保険金日額 ケガで通院したとき (30 日限度)	2,000 円	1,500 円	1,000 円
	年間保険料	18,000 円	16,000 円	13,000 円

(※1) 学校の管理下における活動中、クラブ活動などでのスポーツ中に、学校・クラブ・スポーツなどにおいて定められた指示やルールに従っている間に発生した事故については、通常、被保険者に法律上の損害賠償責任が生じないことが多く、補償の対象とならないことがあります。
(※2) 個人賠償責任補償をご契約されているお客さまで、別の保険契約にてこれらと同種の補償をセットされている場合には、補償が重複する場合があります。補償が重複している場合、補償の対象となる事故について、どちらの保険契約からでも補償されますが、いずれか一方の保険契約からは保険金の一部または全部が支払われない場合があります。ご契約前に、補償内容の差異や保険金額等をご確認のうえ、補償プランをご検討ください。

◎この広告は保険商品の概要をご説明したものです。詳細につきましては、パンフレット等をご覧ください。下記【連絡・お問い合わせ先】にお問い合わせください。

株式会社ジェイアイシー事業所一覧

【連絡・お問い合わせ先】

関東・新潟地区：株式会社ジェイアイシー

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビル 2 号館 2 階
TEL：03-5321-3373 FAX：03-5321-4774

東北地区：株式会社ジェイアイシー南東北支店

〒980-0804 宮城県仙台市青葉区大町 2-3-11 レイトンビル 7F
TEL：022-265-0010 FAX：022-264-0081

北海道地区：株式会社ジェイアイシー北海道支店

〒060-0042 北海道札幌市中央区大通西 13 丁目 4 番地 102 レジディア大通公園 2F
TEL：011-221-7009 FAX：011-221-1704

※その他地域の方については、関東・新潟地区担当の株式会社ジェイアイシーまで
「A I G 損保の聾学校生徒のための総合補償制度について」を見たお問い合わせください。

【引受保険会社】A I G 損害保険株式会社 首都圏地域事業本部 東京第二プロチャネル営業部

<https://www.aig.co.jp/sonpo>
TEL：03-5401-3660 受付時間 9：00~17：00 (土・日・祝日・年末年始を除く)

